

平成12年度（主）鳥羽磯部線緊急地方道路整備事業にかかる

松尾前田遺跡発掘調査報告

2001年3月

三重県埋蔵文化財センター

序

松尾町は志摩地方の中央部に位置し、古来、加茂川と山の自然に囲まれた土地です。

今日の私たちの暮らしにはこういった自然に対して積み重ねてきた知恵や工夫がいきづいています。さてこの松尾町は古くは加茂五郷のうちの松尾村にあたり、街道の整備とともに栄えてきました。また隣接する船津村はその名が示すように古代の陸・海の入り口にあたり、流通の要衝の役割をになってきた場所でもあります。このことから五郷のなかでも人々の往来は盛んで、物資も豊富に取り交わされました。

今回報告いたします松尾前田遺跡は県道鳥羽磯部線の改良工事によって、その一部が消滅します。ここに埋もれている遺構や遺物を記録保存することによって三重県民の文化遺産として活用することが肝要かと考えます。我々の祖先が残してきたこの埋蔵文化財は、貴重な歴史遺産であり、これらを後世の人々に伝えていくことこそ我々現代社会に生きる人の責務です。

この発掘調査にあたりましては、地元松尾町、岩倉町、桃取町の方々をはじめ、鳥羽市教育委員会、南勢志摩県民局志摩建設部、(財)三重県農業開発公社からご協力をいただきました。厚く御礼申し上げます。

2001年3月

三重県埋蔵文化財センター

所長 藤澤英三

例　　言

- 1 本書は、三重県鳥羽市松尾町字前田地内に属する松尾前田遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、主要地方道鳥羽磯部線緊急地方道路（B）整備事業に伴って、緊急発掘調査を実施したものである。
- 3 調査の体制は以下のとおりである。

調査主体	三重県教育委員会
調査担当	三重県埋蔵文化財センター
	調査第一課　　主事　中川　明・筒井英俊
調査協力	(財)三重県農業開発公社
調査期間	平成12年6月12日～平成12年11月10日
- 4 当報告書の作成業務は三重県埋蔵文化財センター調査第一課および資料普及グループ職員が行い、執筆及び全体編集は、中川が担当し、図表等は筒井が編集をおこなった。遺構・遺物写真撮影は中川が実施した。
- 5 本書で示す方位は、国土調査法の第VI座標系を基準とし、方位の表示は座標北を示す。なお、磁北は $6^{\circ} 30'$ 西偏（平成9年8月）している。
- 6 本文及び図表中で用いた遺構表示略記号は、以下のとおりである。

SB:掘立柱建物	SD:溝・自然流路	SK:土坑	Pit:柱穴・小穴	SE:井戸
----------	-----------	-------	-----------	-------
- 7 本書で報告した記録及び出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。
- 8 調査にあたっては、地元鳥羽市松尾町、岩倉町、桃取町の方々をはじめ、鳥羽市教育委員会、三重県南勢志摩県民局志摩建設部にご協力を頂いた。記して謝意を表します。
- 9 スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本文目次

I. 前言	1~2
II. 位置と歴史的環境	3~6
III. 遺構と基本的層序	7~15
IV. 遺物	15~20
V. 結語	21~23

挿図目次

第1図 遺跡位置図	4
第2図 遺跡周辺地形図	6
第3図 遺跡周辺の旧状	6
第4図 調査区位置図	7
第5図 土層断面図	8
第6図 遺構平面図	9~10
第7図 S H1・S B13・14・15・16実測図	13
第8図 S K18・20・12・19・22・7実測図	14
第9図 出土遺物実測図（1）	18
第10図 出土遺物実測図（2）	19
第11図 出土遺物実測図（3）	20
第12図 中南勢地域の掘立柱建物 1	22
第13図 中南勢地域の掘立柱建物 2	23

表目次

第1表 鳥羽市周辺の遺跡	5
第2表 遺構観察表	12
第3表 遺物観察表	24~26
第4表 中南勢地方の建物例	23

写真目次

P L 1 調査区東半（西から）	
調査区西半（東から）	
P L 2 調査区東半（西から）	
S K18（南から）・S K20（東から）	
P L 3 S B13・14（西から）　土坑群（東から）	
P L 4 出土遺物 1	
P L 5 出土遺物 2	
P L 6 出土遺物 3	
P L 7 出土遺物 4	

I 前 言

1 調査に至る経緯

主要地方道鳥羽磯部線は鳥羽市から志摩方面へ向かう幹線道路である。地元住民の要望により、交通渋滞緩和のため、改良工事が実施されるようになり、文化財保護の目的で緊急発掘調査を行うことになった。調査地の現況の地目は、畠地及び荒地である。

本遺跡は、平成10年度の分布調査で古代の土師器や陶器が採集され、遺跡範囲が確認されてきた。当センターは、さらに遺跡を詳細に把握するために、平成11年10月に試掘調査を実施した。その結果、平安時代の土坑と、その周辺から灰釉陶器を確認した。これらのことから前田地区には平安時代以降の遺構の存在が明白となった。この結果をもとに県土整備部道路整備課、及び志摩建設部と協議を重ねた結果、遺跡が削平される部分を発掘調査し、記録保存することとなった。調査面積は1,350m²である。現地での調査期間は平成12年6月12日～同年9月8日である。

2 調査の経過と方法

[調査区の設定]

道路予定地内に設定されたセンターライン（№7～10）の直線部分を基軸に4mメッシュに区切った。掘削の順序から東から西へ数字の1～19を、北から南へアルファベットのA～Iとし、それらの組み合わせで各地区を設定し、グリッド名で呼称した。

[掘削の方法]

掘削は表土及び一部の包含層掘削を重機で行い、表土直下の遺構面までを移植ゴテを使い、人力掘削を行った。

[調査の方法]

調査は、近鉄線に近い東側からはじめ西側へ進めていった。排土置場がないために調査区の中央で一時掘削を終了し、記録保存した。東半部を埋め戻した後、西方から掘削を再開し、全調査区の調査を完了した。

[図面作成について]

土層断面図・遺構平面図はそれぞれ縮尺1/20で作成し、各遺構別の平面図・土層図は一部縮尺を1/10として作成した。

[遺構写真について]

調査区全景をローリングタワー上から6×9ウイスターカメラを使用し、各個別の遺構を6×9ウイスタ及び35mmニコンカメラを使用して撮影した。フィルムはモノクロはネオパンSS、カラーリバーサルはSENSIA IIである。

[調査日誌（抄）]

- 6月13日 重機で表土掘削開始
6月14日 重機掘削完了。
6月15日 地区杭設定終了。仮座標点の計測。
6月19日 現場事務所設営。
6月20日 作業員開始、作業内容説明。
6月22日 包含層掘削。遺構検出開始（F3列まで）。溝2条とPitを検出。
7月7日 土坑（後に竪穴住居）、溝を検出、掘削終了。
7月7日 6列グリッドまで掘削終了。廃棄土坑を検出。
7月18日 9列から10列グリッドまで検出完了。中世の礫を多量に含む溝検出、掘削。
7月26日 東半部の土層断面図作成。
8月1日 再検出、ローリングタワー設営。遺構写真撮影終了。
8月2日 遺構実測図作成及び、コサック完了。
8月3日 重機で下層確認を実施（TP3まで）
8月4日・7日 西半部を重機で表土掘削。地区杭設定完了。
8月8日 包含層掘削開始。
8月9日 F15周辺に剥片集中して出土。地点を遺構カードに記録。
8月10日 土坑掘削、縄文土器・剥片出土。西方へ拡大が予想される。
8月17日 12列グリッドまで掘削完了。センターから北側は近代の搅乱で削平される。
8月28日 遺構再検出。ベルコン撤去。遺構写真撮影。発掘用具片付け。作業員終了。
8月30日 遺構平面図作成。（～1日まで）
9月1日 コサック完了。

9月5日 下層確認、土量計測終了、図面作成データ集計。

9月8日 志摩建設部に現地引渡し終了。

3 文化財保護法等による諸通知

文化財保護法（以下、法）等にかかる諸通知は、
以下により県教育長等宛に行っている。

・法に基づく三重県文化財保護条例第48条第1項

（県教育長あて）

平成12年4月17日付け道整第38号

・法第58条の2第1項（県教育長あて）

平成12年4月21日付け教理第80号

・遺失物法による文化財発見・届出通知（鳥羽警察
署長あて）

平成12年12月22日付け教生第229-8号（県教育長
通知）

II 位置と歴史的環境

1 位置と地形

鳥羽市松尾町に位置する（1）松尾前田遺跡は、加茂川右岸の段丘に広がる遺跡である。現在は周辺の水田より一段高い場所だけが残されており、一部畠地として利用されている。標高は平均で7.6mである。以下周辺の遺跡を時代順に記述する。

2 歴史的環境

加茂川流域の船津・河内・岩倉・松尾・白木の集落は、加茂五郷と言われていた。^① その周辺には松尾町に位置する松尾前田遺跡を始め、各時代、さまざまな遺跡が分布している。

鳥羽市岩倉町に位置する（2）中尾遺跡は、縄文時代の遺跡で、石鏃・石錐が出土している。千賀町里に位置する（3）城山遺跡では、局部磨製石斧が出土している。^② その当時の採集・狩猟・漁労生活の一端がうかがえる。

安楽島に位置する（4）贊遺跡は、縄文時代中期から鎌倉時代にかけて続いた、重層的な複合遺跡であることが確認されている。この地方でもよく知られた遺跡で、昭和47年、及び昭和60年の2度に亘る発掘調査が実施された。調査の結果、6000m²にわたって遺物の散布が見られ、竪穴住居跡・掘立柱建物跡等建造物跡17戸や古墳6基、製塩跡が認められた。石器・縄文土器・製塩土器・灰釉陶器・山茶椀等の各時代の多くの遺物が発見された。^③ 縄文土器は、詳細な研究調査によって縄文中期初頭からのものであることが解明された。窯は設けず、同一文化圏のそれぞれの横の情報を交換した上で野焼きに近い状態で焼成した説が研究者間で有力となり、文献とも比較され、志摩地方の時代様相が次第に明らかになった。また、弥生時代の銅鏃や、奈良、平安時代の帶や太刀の金具、和同開珎など銅製品は、他に例を見ない程の数を誇っている。現在は鳥羽の庭園になっている。

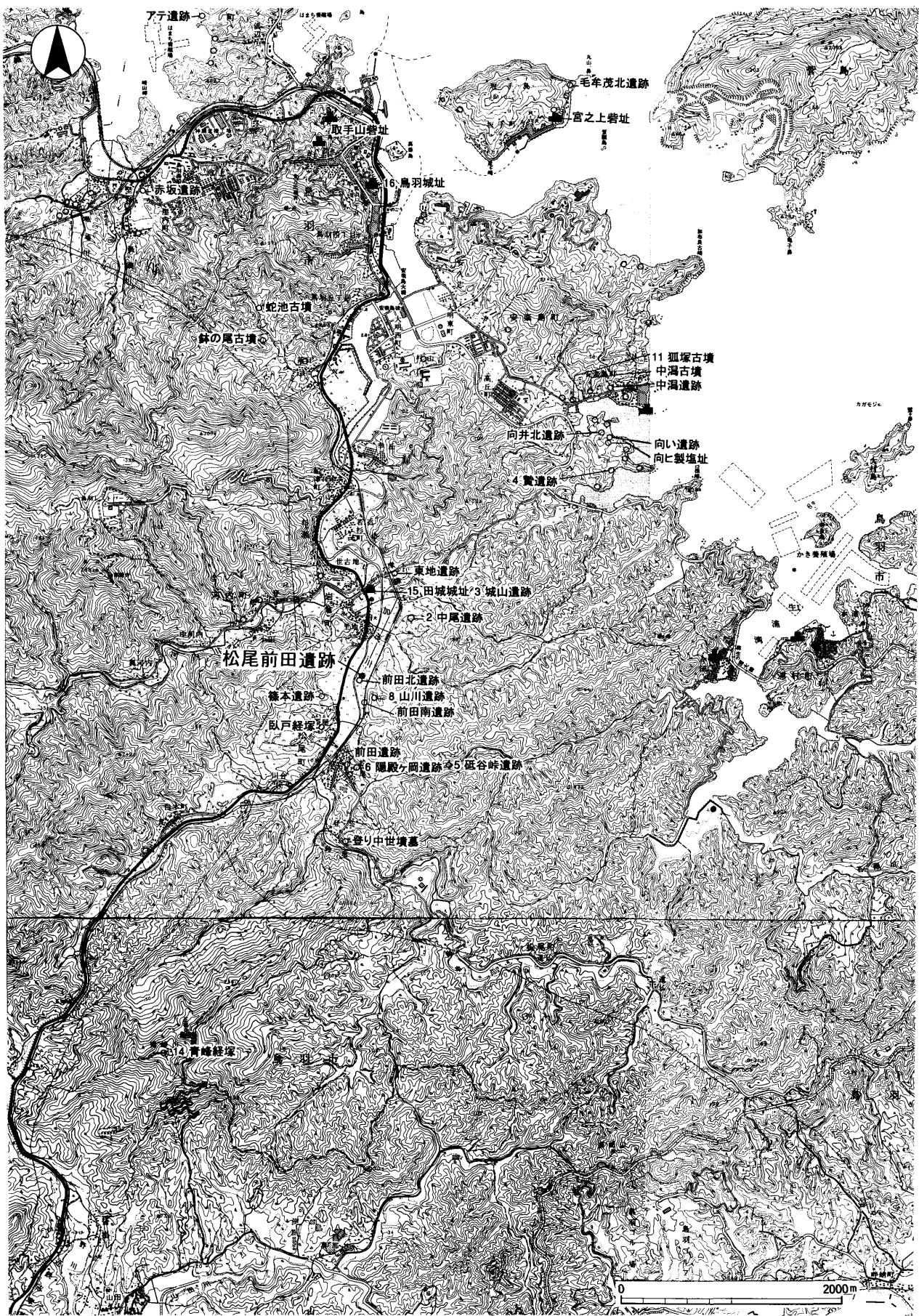
岩倉町に位置する（5）砥谷峠遺跡は、弥生時代の遺跡で、石鏃が出土している。松尾町に位置する（6）隠殿ヶ岡遺跡では、磨製石斧が出土している。本浦町に位置する（7）白浜遺跡も弥生時代を代表

する遺跡で、発掘調査の結果、壺形土器などの東海地方特有の土器が多数出土している。^④ 松尾町に位置する（8）山川遺跡では、後期の高杯が出土している。贊遺跡や答志町に位置する（9）大畠遺跡や浦村町に位置する（10）白浜貝塚遺跡では、住居跡が発見されている。これらの調査によって鳥羽地方に分布する縄文住居跡が立地的に高低差が大きいのに対して、当代の住居跡になると高低差が小さい、安定した平野部に分布することが明らかになった。

続く古墳時代は、大和地方の文化の伝播が遅れ、5世紀末頃に開ける。安楽島町に位置する（11）狐塚古墳や答志町に位置する（12）蟹穴古墳は、横穴式石室を有する古墳として知られ、蟹穴古墳からは、珍しい須恵器の脚付鳥蓋壺が出土している。^⑤ 一方贊遺跡の土師器は、須恵器の器形を模倣した品が発見され、詳細な調査の結果、器種別の用途が明らかになった。

古代になると、この地域は志摩国として治められ、中央に租税として塩やその他の海産物を納めていた。鳥羽に御厨・御園・莊園・神戸が存在していたことや、船津が駅家の想定地でもあり、条里制を施行していたことは、中央の地方への影響力を物語るものである。^⑥ 各地域にそれに関係する文献も残されている。平安時代になると丘陵の小高いところに経塚が作られるようになる。これらには骨蔵器とお経が納められ、埋められていたようである。朝熊山の（13）朝熊経塚や青峰山に所在する（14）青峯経塚が有名である。^⑦

中世に入り、有力な氏族が居城を築くようになる。九鬼氏の（15）田城城址は有名である。田城は、加茂川の本流と河内川が合流するあたりの、孤立した丘陵を利用した城である。波切にいた九鬼氏の北進の拠点として、天文年中（1532～1553年）、4代泰隆のころに築かれたとされている。加茂地区は、志摩の乏しい穀倉地帯の一つであり、田城はその中心をなすという地の利に恵まれていた。嘉隆の鳥羽進出の足掛かりとして、重要な位置を占めるものであった。嘉隆が（16）鳥羽城を築城後は、次第にその役



第1図 遺跡位置図 (1 : 50,000) (国土地理院「鳥羽・浦村・磯部・安乗」1 : 25,000による)

割を果たさなくなった。寛永3年（1626）守隆の時、病や子の夭折など度重なる不幸を、父嘉隆によって殺されたその甥澄隆のたたりとし、冥福を祈るためにここに社を築くことになる。この社は明治43（1910）

（註）

- ①松尾村、「日本歴史地名体系24・三重県の地名」 平凡社 1985. 5
- ②「鳥羽市史上巻」 鳥羽市教育委員会 1991.3による。後述する他の遺跡についても概ね市史
- ③「鳥羽 貢遺跡」1・2次発掘調査報告、鳥羽市教育委員会、1975. 3、1987. 3
- ④「白浜遺跡発掘調査報告」本浦遺跡調査団、1990
- ⑤「蟹穴古墳発掘調査報告」三重県史資料調査報告書別冊、三重県県史編さん室、1999
- ⑥「古代の交通路Ⅰ」 藤岡謙二郎編 大明堂1978年及び

鶴家想定地について、「歴史時代の集落と交通路」、藤本利治著、地人書房 1989に諸氏の研究調査がまとめられている。

- ⑦埋教信仰、「伊勢の経塚」伊勢市郷土資料館主催第4回特別展図録第5冊、1991. 2

年、現在の加茂神社に合祀された。昭和30（1955）年には、九鬼岩倉神社として、九鬼澄隆ほか三体を祭神とする祠が設けられている。今は神社の境内部分を残すだけとなっている。

（筒井）

松尾前田遺跡周辺の遺跡一覧

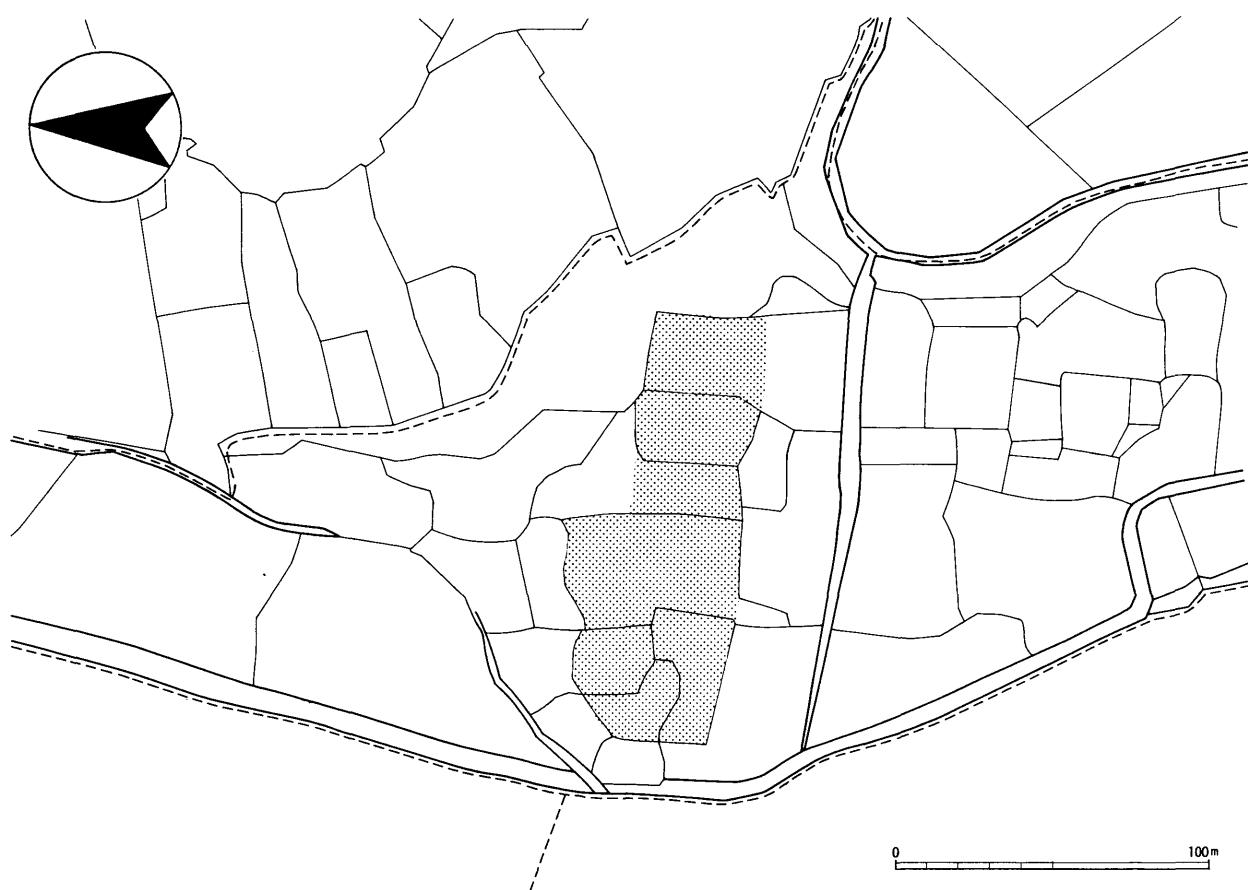
報告書番号	遺跡番号	遺跡名	縄文	弥生	古墳	～	古代	中世	概要（特色）	
									石器	須恵器
2	47	なかおいせき 中尾遺跡	●	●	●	●	●	●	石鏃、須恵器、石錐	
3	46	しろやまいせき 城山遺跡	●	●	●	●	●	●	局部磨製石斧、弥生土器、土師器片、常滑焼、甲賀式土器	
4	187	ねえいせき 贊遺跡	●	●	●	●	●	●	散布域6,000m ² 、製塩跡、豎穴住居跡、掘立柱跡、縄文土器、製塩土器、山茶椀等縄文中期よりの複合	
5	44	とだにとうげいせき 砥谷峠遺跡	●	●	●	●	●	●	石鏃、サヌカイト、鉄、石英	
6	169	おんじんでんがおかいせき 隱殿ヶ岡遺跡	●	●	●	●	●	●	弥生式石斧	
7	72	しらはまいせき 白浜遺跡	●	●	●	●	●	●	縄文土器、弥生土器、壺型土器、土師器、須恵器、石器、骨角器、青銅器、動植物遺体	
8	45	やまごいせき 山川遺跡	●	●	●	●	●	●	弥生後期高杯脚部1個、土師器片	
9	30	おばたけいせき 大畑遺跡	●	●	●	●	●	●	散布域80,000m ² 、炉跡、住居跡、弥生土器、石器、土師器、須恵器片、旅館、民家建設により漸次破壊	
10	72	しらはまかづかいせき 白浜貝塚遺跡	●	●	●	●	●	●	散布域10,000m ² 、住居跡、土師器片	
	25	けむりもきたいせき 牟茂北遺跡	●	●	●	●	●	●	弥生土器、土師器、須恵器片	
11	145	きつづかこぶん 狐塚古墳	●	●	●	●	●	●	須恵器壺、杯、壺、横穴式石室有す	
12	42	がにあなこぶん 蟹穴古墳	●	●	●	●	●	●	横穴式石室有す、須恵器（長頸壺）、脚付鳥蓋壺	
	28	アテ遺跡	●	●	●	●	●	●	11,000m ² 、須恵器、瓷器片、灰色山茶椀、陶器	
	48	はちよこぶん 鉢の尾古墳	●	●	●	●	●	●	須恵器、鎌倉茶壺	
52	中湯遺跡	●	●	●	●	●	●	●	弥生土器、土師器、須恵器片	
53	中湯古墳	●	●	●	●	●	●	●	須恵器、勾玉	
166	じゅけいこぶん 蛇池古墳	●	●	●	●	●	●	●	土師器、須恵器、直刀、甲賀式土器、横穴式石室	
168	くまくらこぶん 熊倉古墳	●	●	●	●	●	●	●	須恵器（蓋杯）、土師器（椀）、刀子	
299	まつはなこぶん 松ノ鼻古墳	●	●	●	●	●	●	●	円墳、径約9m高さ1m、横穴式石室南東方向に開口	
302	ひがじいせき 東地遺跡	●	●	●	●	●	●	●	100×100m、山茶椀、須恵器杯蓋、壺、土師器片	
95	あかさかいせき 赤坂遺跡	●	●	●	●	●	●	●	10,000m ² 、土師器、須恵器、瓷器片	
240	しじもといせき 篠木遺跡	●	●	●	●	●	●	●	須恵質土器高杯台、須恵器壺、壺、土師質土器	
241	まえだいせき 前田遺跡	●	●	●	●	●	●	●	土師器、須恵器、瓷器片	
292	じかいくきたいせき 向井北遺跡	●	●	●	●	●	●	●	30×30m、土師器、須恵器片、製塩跡	
293	むかせいさんあど 向ヒ製塩址	●	●	●	●	●	●	●	30（EW）×70~120（NS）、灰釉陶器、土師器片	
229	むかいいせき 向い遺跡	●	●	●	●	●	奈良	●	土師器、須恵器片	
13	あさまきよづか 朝熊経塚	●	●	●	●	●	平安	●	骨蔵器、お経、陶経筒、経筒、銅鏡、刀剣	
14	あおみねきょうづか 青峰経塚	●	●	●	●	●	平安	●	石積み、4m ² 、高さ1.5m、鏡1面	
196	とりやすまとりあと 手山岩址	●	●	●	●	●	●	●	永正、立花氏城主	
201	みやうとうまとりあと 宮之上岩址	●	●	●	●	●	●	●	67×28m、経塚、土壘	
15	たじょうじょうざと 田城城址	●	●	●	●	●	●	●	天文、九鬼泰隆	
294	まえだきたいせき 前田北遺跡	●	●	●	●	●	●	●	50×50m、山茶椀片、土師器片	
295	まえだみなんいせき 前田南遺跡	●	●	●	●	●	●	●	50×100m、土師器、山茶椀	
49	おせどきょうづか 臥戸経塚	●	●	●	●	●	鎌倉	●	鏡1面、白銅鏡（菊花双鏡）	
170	のぼりうちせいふな 登り中世墳墓	●	●	●	●	●	室町	●	骨壺、石斧	
16	とばじょあど 鳥羽城址	●	●	●	●	●	●	●	九鬼嘉隆1594年築城、本丸、石垣、別称「錦城」	

第1表 鳥羽市周辺の遺跡

※『三重県遺跡跡地図』及び『鳥羽市史』から修正



第2図 遺跡周辺地形図 (1 : 2,500)



第3図 遺跡周辺の旧状

III 基本的層序と遺構

1 層序

調査区は東側の丘陵中腹から西へ延びる尾根が加茂川に接する地点で扇状に広がる。地形上は河岸段丘の範疇である。表土直下で確認した基盤層は、黄褐色あるいは橙色系の小石を含む土層である。遺構を検出したのは本層上である。過去に行われた地質調査によると、今回の調査区に隣接する岩倉町から当松尾町には中生界に形成された砂岩系の松尾層群が湾岸から介入しており、独特の基盤が生成されているようである。^①

以下、基本的な層序を順に記述する。

第1層は暗茶色土（表土）、第2層暗灰褐色土（床土）
第3層黄褐色土（基盤層）が堆積しており、主要な
縄文時代と平安時代～室町時代の遺構は第3層上か
ら掘削されている。

（註）

①三重県地質図集「鳥羽市内の地質図」三重県高等
学校理科教育研究会地質部会編 磯部 克編著

2 遺構

調査区で確認した主な遺構は竪穴住居が1棟、掘立柱建物4棟、他に土坑、溝がある。

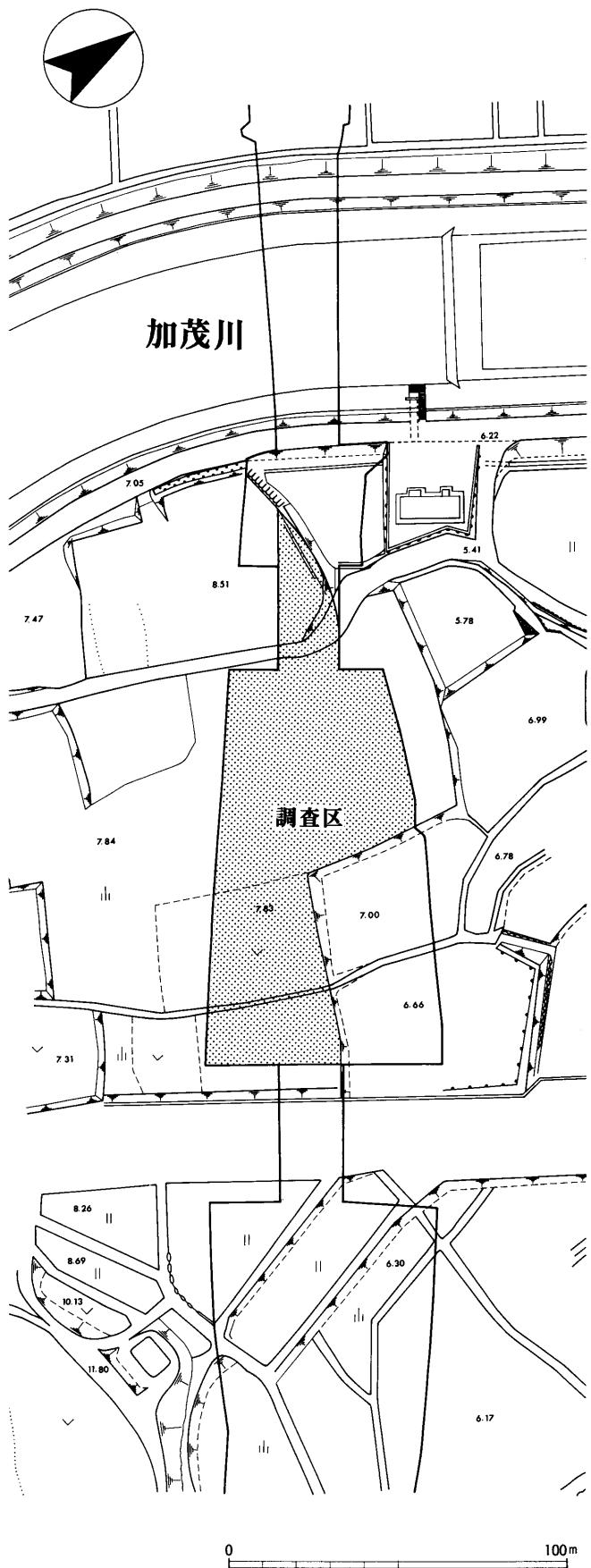
時代順に以下記述する。

[縄文時代]

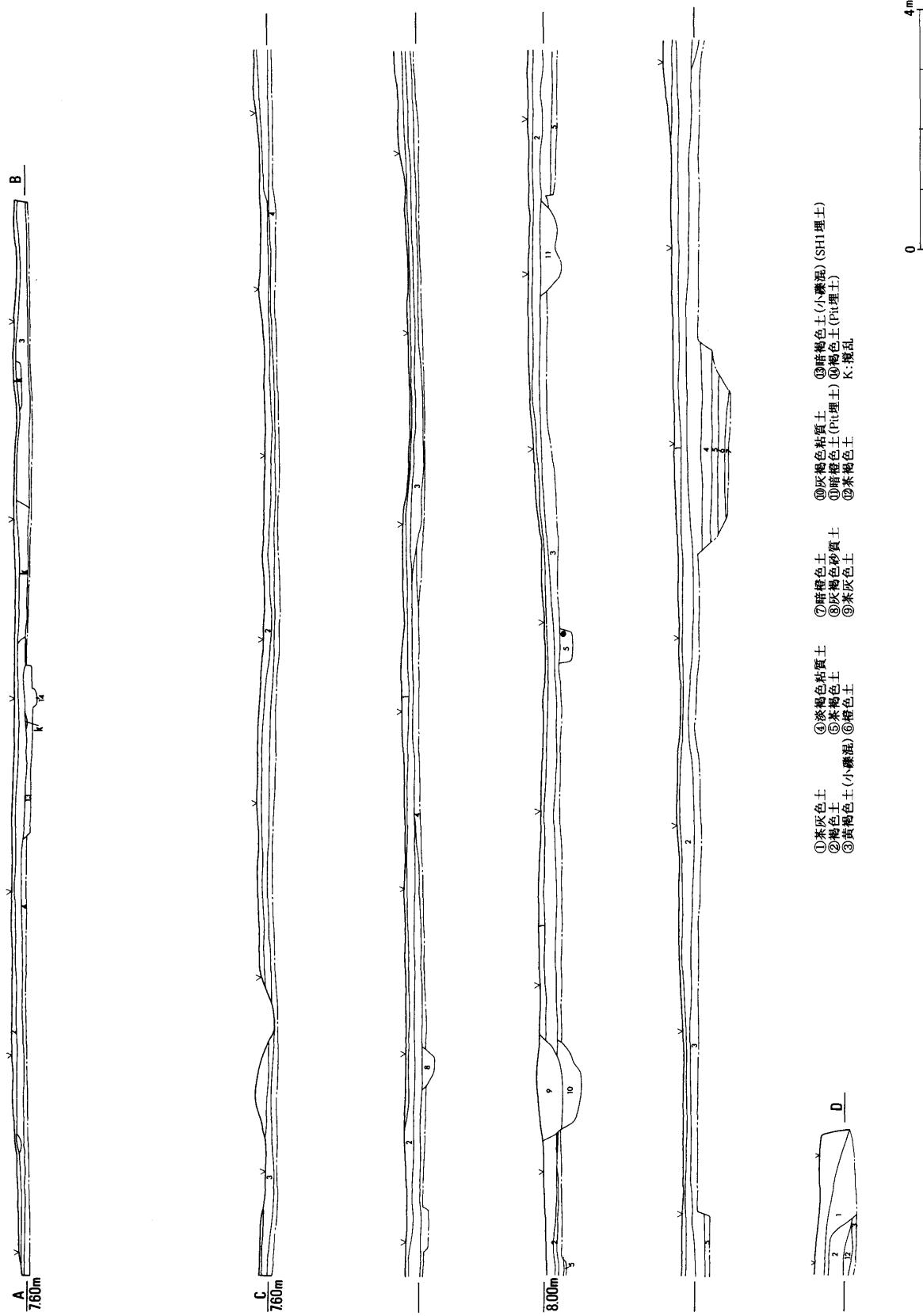
この時期の遺構は、調査区の南辺に帶状に分布し、
さらに調査区外に広がる傾向がある。確認した遺構
は土坑である。順に報告する。

土坑SK18 F～G14で検出した。東西1.6m、南北3.5m、
深さ0.2mで南北に長細い遺構である。チャート製
片と無紋土器が出土した。土器の劣化が酷く、詳細
な時期は不明であるが、剥片の状況から縄文時代の
中期以前に相当するものと考えられる。西壁の中央
付近にPitが掘られており、内部で剥片を含む焼
土ブロックを検出した。これらは埋没直前に掘削さ
れたものとみられる。

土坑SK20 G11～12で検出した。東西3.4m、南北1.4m、
最深0.6mの長楕円形の土坑である。断面形状は深い
Uの字形である。埋土はSK18に比較すると3層に分



第4図 調査区位置図 (1 : 2,000)



第5図 土層断面図 (1 : 100)



第6図 遺構平面図 (1 : 200)

層される。深い褐色系を呈する。G11P2と重複しているが、断面観察の結果、本遺構埋没後に掘削されたもので単独のものである。埋土から石鏃と土器が出土している。

[奈良時代]

竪穴住居SH1 G1で検出した。平面プランはやや楕円気味な方形で、東西2.7m、南北3.3m、床面までの深さは0.15mである。周溝は確認していない。主柱穴は直径0.4m、深さ0.2mである。遺物は確認していない。建物の南東側で貯蔵穴を検出した。径は0.6mである。埋土は暗褐色を呈し、土師器が出土している。柱穴と重複する土坑は埋没後の遺構で、出土した土師器片から推察すると殆ど同時期の遺構で後期末まで機能していた遺構と考えられる。

[平安時代～鎌倉時代]

建物SB13 調査区の南東隅にあたるH・I、1～2で検出した。東西3間×南北1間以上の掘立柱建物である。棟方向はE40°Sで、柱間は1.6mの等間である。掘削域に制約があり、庇の有無は確認していない。Pitは径が0.3m、深さは0.3mである。掘形の埋土は暗褐色で、縁釉陶器（1）が出土している。柱痕跡は確認できなかった。

建物SB14 上記の13と重複して検出した。13に後出する、東西2間×南北1間以上の掘立柱建物である。庇はSB13同様、確認できなかった。棟方向はE25°Sで、13に比べて15°北に振る。柱間は2.1mの等間である。時期的には13と同様である。

土坑SK2 調査区東端のE2で検出した。旧耕作土も混じり、遺構の残存状況も良好でないが、橙褐色の埋土から当代の土師器杯が出土している。

溝SD4 F～H3で検出した。搅乱が著しく、全体は方形の遺構と考えられるが、確認できたのは東側半分である。内側の長さは6.0mである。幅は0.4mである。底部の形状は箱形である。土師器杯（4）が出土した。陶器片も確認したが、これらは混入品であるとみられる。

溝SD5 SD4の北隣、E3・E～G4で検出した。F5直前で南から方向を転換し、東方に流出する。幅は0.4mである。東側で検出したPit2は本遺構の延長部分と考えられる。土師器皿（6）が出土した。

溝SD6 SD5と同性格の溝であるとみられる。幅は

0.9m、深さ0.2mである。土師器小片が出土している。時期的には平安時代後期末に相当する。

土坑SK2 調査区北東隅で確認した、残存長が東西1.1m、南北2.2mである。搅乱が激しく、全体形は調査区北及び東側へ広がる。出土遺物が小片であるため、詳細時期は不明である。

土坑SK10 SD9の西側、H7で検出した。東西1.2m、南北1.1m以上、深さ0.2mである。この時期の他の遺構埋土とは違い、黒褐色が特徴である。灰釉陶器（8）が出土している。

[鎌倉時代～室町時代]

建物SB15 SB13、14の西側、F～G、5～6で検出した。東西4間×南北2間の掘立柱建物である。庇は持たない。棟方向はN8°Wで、13、14に比べて南に振る。柱間は1.5mの等間である。Pitは径が0.25m、深さは、上層がかなり搅乱を受けていたために浅く、0.2mである。柱痕跡は確認できなかった。掘形から土師器甕（9）が出土している。時期的には鎌倉時代後期に相当すると考えられる。

建物SB16 建物15の南隣、G～H、5～6で検出した。東西3間×南北2間の掘立柱建物である。庇は持たない。棟方向はN50°Wで16に比較するとさらに南に振れる。Pitは建物15に比べ、残存状況が悪く、西隅が良好に検出できていない。柱穴の直径は0.2mに満たないものもある。深さも一様でなく0.1m程である。土坑SK7 F～H7で検出した。東西2.6m、南北3.2mの遺構である。深さは0.2mで、底部はほぼ平坦である。埋土から土師器甕（13）が出土した。時期的には鎌倉時代初頭頃に相当する。

溝SD9 F～H7で検出した。幅0.9m、深さ0.5mである。すぐ西側の基盤と比高差があり、高い西から南へ流出した遺構であると考えられる。性格、用途としてはSD8と同様、暗渠と考えられる。礫の間から出土例の少ない内耳鍋（19）・陶器鉢（22）が出土した。

土坑SK12 F12で検出した。SD8との重複関係が不明瞭であるが、一応単独の遺構と判断した。東西4.0m、深さ0.3m、平面形が楕円形の遺構である。埋土にSD8から混入したと考えられる礫が含まれていた。灰褐色の埋土から山茶碗（24）と陶器（26・27）が出土した。これらから時期的には溝に後出する遺構

と考えられる。

土坑SK19 F~G12で検出した。長軸2.3m、短軸1.5m、深さ0.4mで長楕円形の遺構である。断面は浅い船底状である。淡褐色の埋土から小片であるが陶器(29)が出土した。鎌倉時代初頭頃の遺構である。

土坑SK21 G12で検出した。東西1.4m、南北1.9m、深さ0.2mで不定形な遺構である。SK19の西辺と接しているが遺物の混入は見られない。埋土は褐色で炭化物を多量に含んでいた。出土した土師器が小片であるため詳細な時期は断定できないが、SK19と埋土が似ているためそれに前後する遺構であると考えられる。

土坑SK22 SK19の北隣、F12で検出した。東西2.1m、南北1.4m、深さ0.5mの土坑である。SD23と重複し、出土遺物も混入品が多数見られる。拳大の石も底部でみられた。主な遺物には灰釉陶器がある。中世後

半の遺構である。

溝SD23 SK22と重複する。F11~12で検出した。幅は最大で0.7m、全長は不明である。調査区東側で検出したSD 8・11と同様、多量の礫中に土器が混入する状況であった。現段階ではSD 9と同様の暗渠と考えている。陶器が出土した。

[江戸時代以降]

溝SD3 G2で検出した。幅0.6mで南から北へ流れている。剥片石器の混入もあったが、底部より出土した陶器(31)は当該時期の遺物である。

溝SD8 SD11と重複する、E~F・7~10で検出した。SD 9と同様、礫を多量に確認した。灰褐色の埋土から陶器片(33・34・35)が出土している。時期的には、中期以降に相当する。

溝SD11 F8~9で検出した。SD 8と重複し、これに後出する。幅0.3mで、西から東へ流出する。

竪穴住居

番号	平面形	規模(m)		面積(m ²)	主柱穴	カマド	貯蔵穴	周溝	時期	備考
		東西	南北							
SH1	隅丸方形	2.7	3.3	8.91	有	無	無	無	奈良後期末	

掘立柱建物

番号	規模				棟方向	柱間寸法(m)		時期	備考
	間数	桁行(m)	梁行(m)	面積(m ²)		桁行	梁行		
SB13	3×1以上	3.5	2.5	8.75	東西棟	1.6	1.6	平安末	緑釉陶器碗
SB14	2×1以上	4.2	2.1	8.82	東西棟	2.1	2.1	平安末	
SB15	4×2	7.3	5.0	36.5	南北棟	1.8	1.8	鎌倉後期	
SB16	3×2	7.4	4.9	36.26	南北棟	2.4	2.4	室町前期	梁行不確定

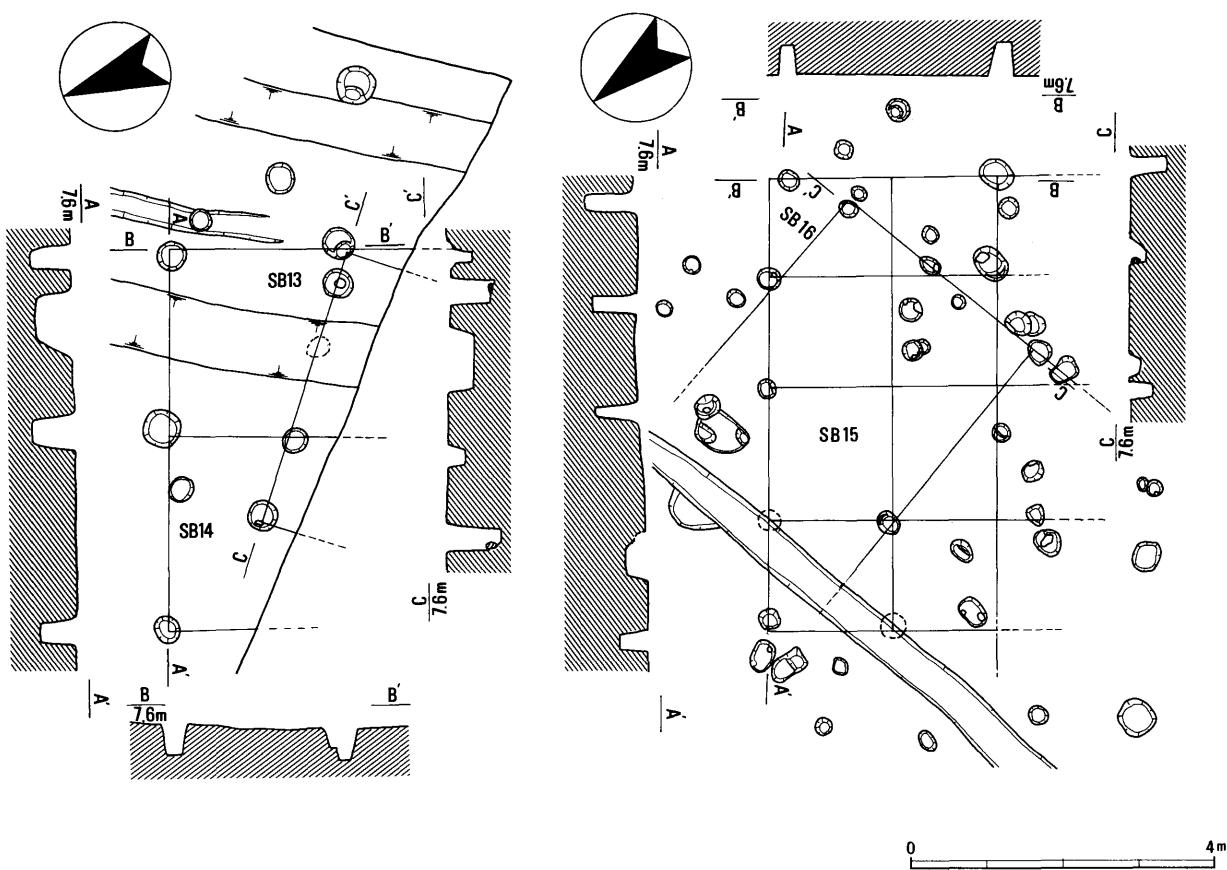
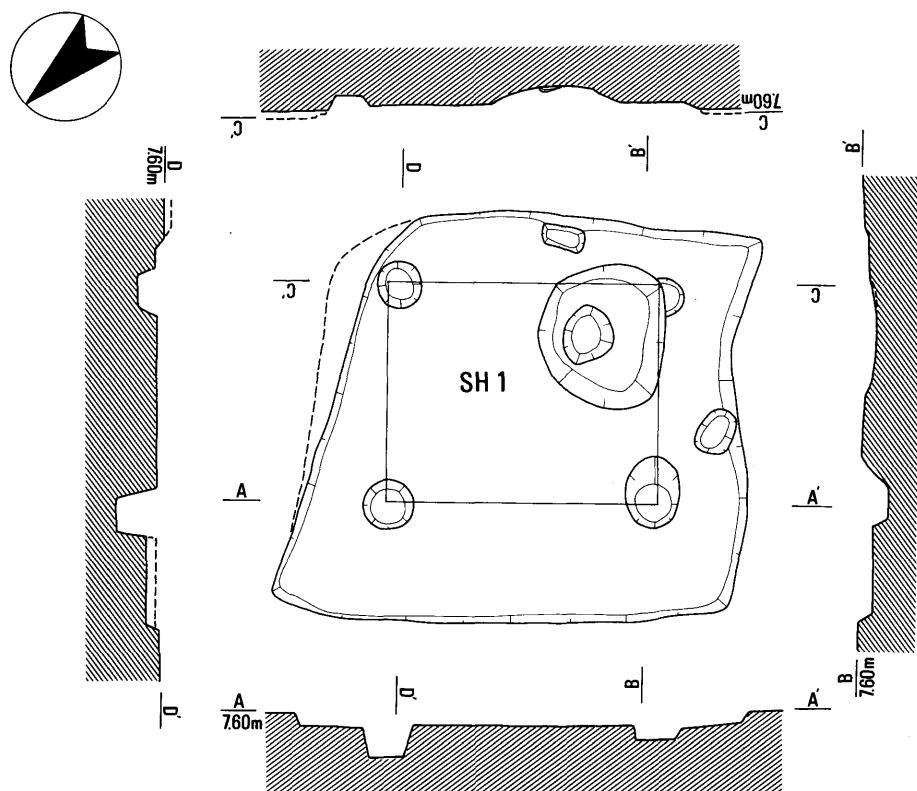
土杭

番号	規模(m)			平面形	方向	層序(埋土)	時期	備考
	東西	南北	深さ					
SK2	1.1	2.2	0.4	不定形	不明	橙褐色	平安時代?	詳細時期不明
SK7	2.6	3.2	0.2	不定形	不明	黒褐色	鎌倉初頭	
SK10	1.2	1.1	0.2	隅丸方形	不明	黒色土(黄ブロック混入)	平安時代中葉	
SK12	4.0	2.2	0.3	長楕円形	東西	暗灰褐色	鎌倉中葉	
SK18	1.6	3.5	0.2	長楕円	南北	黄灰褐色	縄文時代	焼土ピット有
SK19	2.3	1.5	0.4	長楕円	南北	淡褐色	鎌倉中葉	
SK20	3.4	1.4	0.6	長楕円	東西	暗橙色	縄文時代	断面U字形
SK21	1.4	1.9	0.2	不定形	不明	暗橙色(炭含む)	鎌倉中葉	
SK22	2.1	1.4	0.5	長楕円(一部削平か)	東西	褐色(礫含む)	鎌倉後葉	

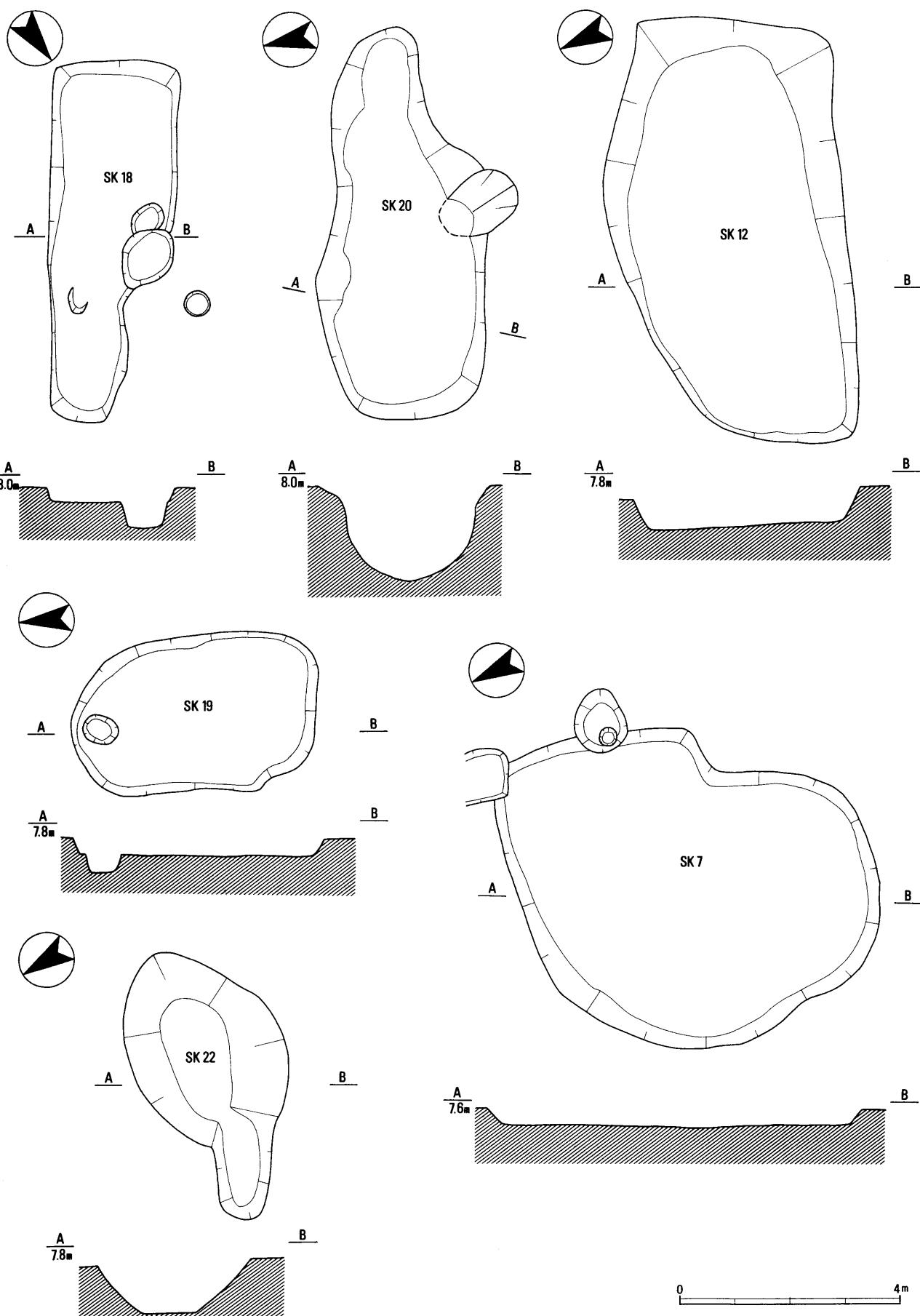
溝

番号	規模(m)			平面形	方向	層序(埋土)	時期	備考
	幅	長さ[残長]	深さ					
SD3	0.6	13.5	0.2	直線	南→北	灰黄褐色	江戸中期	
SD4	0.5	14.4	0.2	コの字形	不明	灰褐色	鎌倉初頭	雨落ち溝
SD5	0.5	11.5	0.3	Lの字形	南→東	灰褐色	~鎌倉前葉	雨落ち溝
SD6	0.9	25.2	0.2	Lの字形	南→東	灰褐色	平安後期・鎌倉前葉	区画溝
SD8	0.6	不明	0.2	直線	南→北	灰褐色	江戸中期	
SD9	0.9	10.4	0.5	Lの字形?	南→西	灰褐色(礫多く含む)	室町中葉	暗渠溝
SD11	0.9	12.4	0.2	緩いカーブ	西→東	灰褐色	江戸後期	
SD17	1.2	11.8	0.3	緩いカーブ	東→西	灰褐色	江戸後期	
SD23	0.7	3.7	0.3	不明	西→東	淡褐色(礫多く含む)	室町後期?	

第2表 遺構観察表



第7図 SH 1・SB 13~16 実測図 (1 : 100)



第8図 SK 18・20・12・19・22・7 実測図 (1 : 100)

溝SD17 D16~17で検出した。幅0.5mである。緩斜面上に掘られている遺構であることから、地形的に高

い東から西へ流れる溝であるとみられる。陶器が出土している。

IV 遺物

はじめに

出土した遺物はコンテナバットに37箱である。内容は主に縄文時代、平安時代、鎌倉から江戸時代と複合性を特徴とする遺跡である。出土遺物は剥片石器、灰釉陶器、山茶碗、常滑焼等多種多様である。順に記述する。

1 平安時代～鎌倉時代

S B 13出土遺物

緑釉陶器椀 (1) は口縁の立ち上がりが緩く、全体的に扁平な器種である。高台径は7.5cmである。

S B 14出土遺物

土師器杯 (2) は杯Bである。体部以下に斜行のハケメが認められる。口径12cmを測る。

S D 4 出土遺物

土師器甕 (5) は口径が19cmである。口縁は緩く外反し、端部はやや内側に摘み上げられ、丸みを帯びる。南伊勢系土師器が出来する直前期のものと思われ、平城V後半期に相当する^①。

土師器皿 (4) はB類の小皿である。底～口縁部にかけての器厚は一定で、分厚い。体部～底部外面には指オサエ後ナデが施されている。口縁は直立するというよりはむしろやや外方に引き出されている。新田氏編年の第I期前半に相当する^②。

S D 5 出土遺物

土師器皿 (6) は底部屈曲部から口縁部にかけてやや厚みを増し、内湾する。端部はナデられて丸みを帯びる。底部の調整が不明であるが、オサエが僅かに残る、伊藤氏の編年によるII b期後半に相当するものと考える。III a期までは及ばない^③。

土師器鍋 (7) は小片で、口径は不明であるが、口縁の折り返しから時期的には鎌倉時代の中葉頃に相当する。

S K 10出土遺物

灰釉陶器椀 (8) は高台部の残片である。底径6.2cm、器厚は薄い。台端部は貼り付け後ナデられて、ほぼ下方に丸く収まる。平安後II期の後半に属する^④。

2 鎌倉～室町時代

S B 15出土遺物

土師器甕 (9) の口縁端部は水平に広がり、内側に広げられる。都城の平城の3段階に相当する^⑤。

S B 16出土遺物

土師器甕 (10) は小型で体部は深い品である。残存率は低いが、僅かに外面に縦ハケメが認められる。鎌倉前期頃の遺物であろう。

灰釉陶器皿 (11・12) は扁平な遺物である。(12)の器高は口径と比較すると低い。4cm未満であろう。

S K 7 出土遺物

土師器甕 (13) は肩から口縁部の残存で、直径が24.5cmとかなり全体形は大きくなる。外面の摩滅は激しいがオサエ後のナデ調整は明瞭に認められる。口縁はヨコナデされ、端部は内側に引き出され丸くおさめられている。鎌倉時代初頭頃の所産である。

土師器皿 (14) は口縁部の残片である。全体の器厚は非常に薄く、屈曲部からの立ち上がり角は急である。口縁端部はナデられて、若干内側に丸められる。玉城町所在の岩出遺跡群出土例と対比すると、口径が17cm内外で、厚みがあり、口縁外面にオサエを施すII-a期のものとは違う、II-b期初頭頃の所産であるとみられる^⑥。

山茶碗 (15・16) は瀬戸産、(17) は知多産である。(15)の底部は厚味があり、1.4cmである。径は6.7cmである。台部は貼り付け後ナデられて、端部は下方に若干丸められて面を有する。藤澤氏編年の第3型式に相当する^⑦。(16)の台端部は(15)と比較すると面を有するというよりむしろ丸く収められている。同型式の範疇であろう。

(17) は上記遺物に比較すると台端部の外面はナ

デられ、外方に開く。器高はより扁平化している^⑤。

陶器捏鉢 (18) は扁平な大型品で、底径は19cmを測る。体部外面はヘラ削りが全面に施される。17世紀後半期の所産であり、当遺構の最も機能していた時期の遺物でなく、混入品の可能性がある。

S D 9 出土遺物

内耳鍋 (19) は口縁部の残存である。器形は体部から口縁にかけて緩く内傾する。端部はヨコナデされて、上部に面を有する。おそらく下方に内耳部を有する品である。器種的には尾張型で、15世紀代の所産である。

当器種は、三重県内では南伊勢地方の東海道遺跡に出土例がある他は類例は少ない^⑥。

山茶椀 (20) は渥美産である。体部から口縁部にかけて強く外反し、端部は引き出されて丸く収まる。

陶器椀 (21) は渥美産の底部残片である。脚部は分厚く、若干八の字状に開き、安定している。ともに藤澤氏の編年によるⅢ—3型式に相当する。

陶器捏鉢 (22) は底部外面に指オサエ痕が明瞭に残る遺物で、残存径は13cmと小型品である。15世紀前半頃の所産である。

S K 12 出土遺物

灰釉陶器椀 (23) は底径6.8cmで、高台は張り付け後ナデられて、端部は垂下する。胎土は他より密である。

山茶椀 (24・25) のうち (24) は瀬戸産で、高台の残存するもの、(25) は高台が張り付けられず、糸切り痕が認められるタイプである。(24) は瀬戸産で、藤澤氏の編年ではⅢ—6型式、(25) はⅢ—7型式に相当するとみられる。

陶器鉢 (26・27) はどれも遺構上面で検出したものである。(26) は土師質の口縁部小片である。大型品で推定径は40cm前後とみられる。常滑産である。(27) は底部残片である。内外面ともにロクロナデされて、釉薬が丁寧に施されている。裏面は糸切り痕がみられるが、施釉はここまで及んでいない。(26) は扁平な器種である。(27) の口縁はヨコナデされ、外方に折り曲げられて、面を有する。(27) は口径が36.6cmで、大型である。口縁端部は内方に曲げられるタイプである。ともに瀬戸産である。17世紀後半の所産である。

鉄製金具 (28) は上記の遺物と同地点で確認したものである。上・下部ともに折損していて全体の長さは不明である。下部の厚みは8mmである。刃部を有しないことから現段階では工具もしくは農具の類であろう。

S K 19 出土遺物

陶器椀 (29) は底径が5.6cmを測る。外面はケズリ出しによって調整されている。高台端部は下方にV字状に突き出ている。線状のスタンプ文が身込みに刻まれている。13世紀初頭の所産である。

灰釉陶器椀 (30) の器厚は体下部では、2mmと薄く、底部からの屈曲が緩く、扁平である。折戸53窯式期に相当するものと思われる。

S D 3 出土遺物

山茶椀 (31) は瀬戸産である。藤澤氏編年のⅢ—7型式に相当するが、包含層からの混入品とみられる。

3 江戸時代～

S D 8 出土遺物

陶器椀 (33・34) は肥前産である。それぞれ流水文・長茎植物が描かれている。18世紀中葉頃の所産である。

陶器皿 (35) は底から高台部にかけてのナデ調整により屈曲部が稜をなす。高台部はやや小さいながら、ハの字形に開き、安定する。17世紀後半の所産である。

Pit (G7P4) 出土遺物

陶器椀 (36) は底部残片である。椀としたが、皿の可能性もある。台径は6.7cm以上になる。本品を含めて他に残片3点がある。

Pit (C9P1) 出土遺物

石鎌 (37) は凹基無茎鎌である。久保勝正氏の分類によると、五角形鎌に属し、D-5に相当する^{⑨⑩}。遺構内出土の製品は本品のみである。先端は小剥離によって山形に作られ、脚端部が微細な剥離によって先細りせず、丸められているのが特徴である。

4 包含層出土遺物

楔形石器 (38・39) のうち (38) は下端部に、(39) は両極部に剥離がみられる。(38) に比較すると (39) の裏面の剥離は大きく両者とも裏面に一次調整痕が

みられる。

石鎌 (40) は凹基無茎三角鎌である。A-b形に相当する。脚部は不揃いで右側がより尖銳で、端部はやや内方に向いている。

搔器 (41) は幅4cmを測る、大型品である。素材は良質のチャートである。左側縁～下刃部に小剥離が施されている。裏面は平らで一次調整痕がみられる。

剥片 (42) の表面に一次調整を残し、右側縁部に小剥離が観察される。裏面は自然礫面を残しつつ、二次調整まで施している。

土師器皿 (43～46) は12世紀中葉から13世紀中葉期に相当する遺物である。残存状況はあまり良好ではないが、当遺跡の土器編年の過程を知る良好な資料と言える。

灰釉陶器椀 (47～52) は猿投産の椀である。(48～49) の脚台部は長く、器厚は薄く、やや外方に突っ張る。

山茶椀 (53～54) は猿投産である。(55～58) は渥美産である。高台端部はハの字形を呈し、台高は高く、1.3cmを測る。時期的には百代寺の時期に相当する。(53) は底部の器厚は0.8mm以上を測り、(57) から若干の時期差が見られる。(59～60) は瀬戸北部産出である。(61～66) は渥美産、(67～68) は出土数の限られている、猿投産の遺物である。

土錘 (69～71) は部分的に欠損しているが、焼成が良質の遺物である。

灰釉陶器皿 (72) は器形が小さく、恐らく上部に椀形の部位が接着すると考えられる。

卸皿 (73) は常滑産の皿である。刷り目は内面底部に密に施されている。

陶器壺 (74) は灰釉が施され、調整が良好な鉢であり、包含層中で唯一の大型品である。

土師器甕 (75～79) は口縁に特徴を示す遺物で、小型の(75・76) は口縁は頸部で屈曲し、外反して、端部はナデられて、内側に丸みを帯びる。

口径は、共に14cmまである。最大径は体上部に求められる。平安時代後半に相当する。(78) は頸部でやや器厚が増し、急激に外反する。端部はナデられ、やや下方に丸められる。

陶器鉢 (80) はロクロ成形により、丁寧につくら

れている。垂直に立ち上げられた体部は口縁部で、やや肥厚し、ナデられている。端部は摘み上げられて、ほぼ水平方向に引き出されている。おそらく蓋付きの器であろう。

陶器火舍 (81) の胴部はやや外側に開き気味に立ち上がり、厚みは8mmと一定である。肥厚する口縁端部はナデ調整されて、上面および側面は平らとなる。

口縁部直下に内径8mmの穿孔が開けられている。

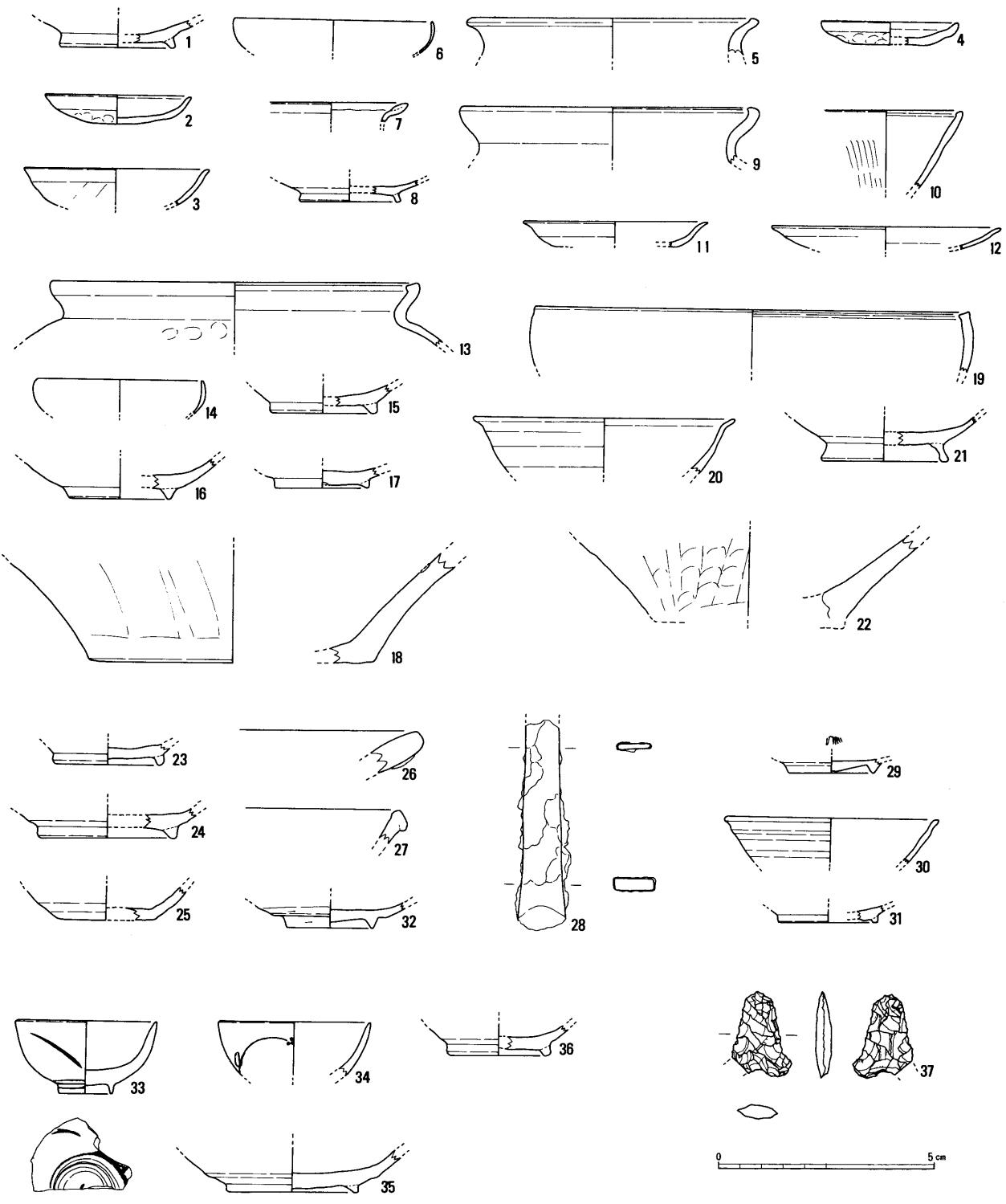
陶器椀 (84) は昭和初期に薬剤の容器として使用されたもので、外面に「芳香肝油」の文字が描かれている。

陶製土管 (85) の口縁部は欠損して調整は確認できない。外面に斜方向のヘラケズリが施されている。肥厚した部分の厚みは1.5mmである。おそらく突帶部の形骸化であろう。

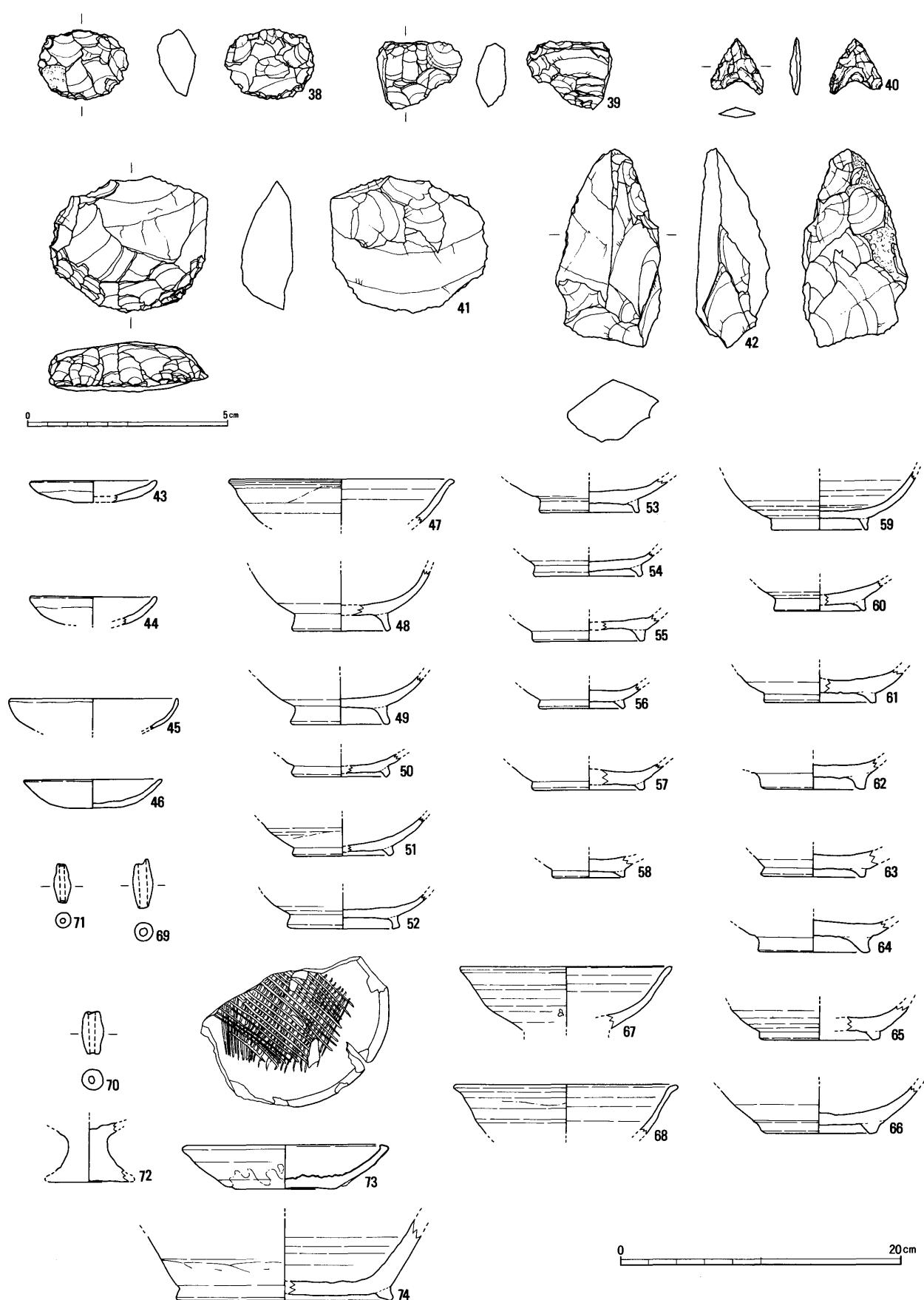
陶器大甕 (87) は器厚は一定で2.4cmである。体部から口縁部まで垂直方向にナデられて、端部は内外面ともに丸みを帯びる。口縁直下の外面に11本の横線が施されている。

(注)

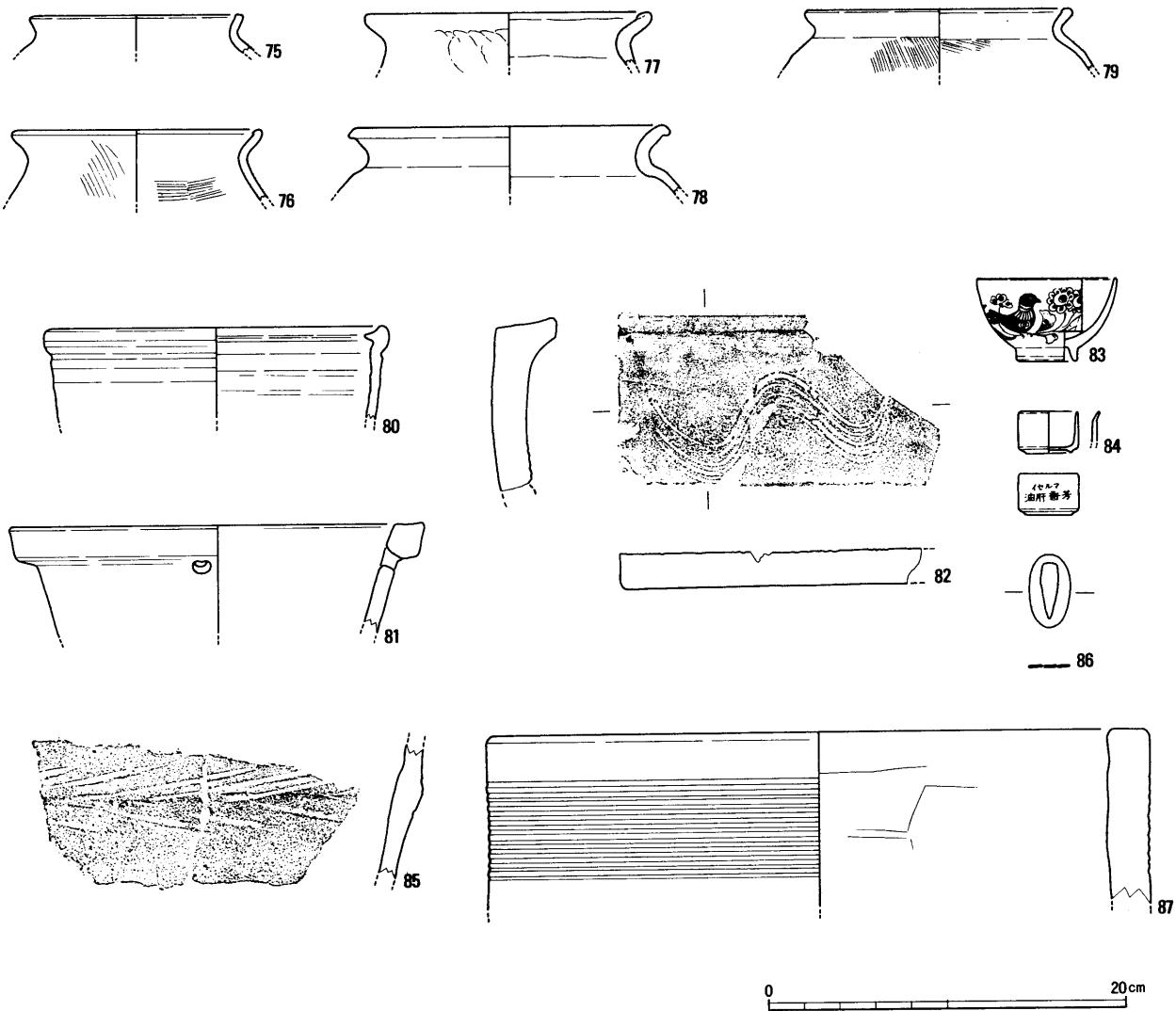
- ① 「三重県斎宮跡調査事務所年報」1984、「史跡・斎宮跡発掘調査概報」、(付篇) 斎宮跡の土師器、1985.3
- ② 新田洋、「中・南伊勢における中世土師器」「マージナルNo.9」、1988.10
- ③ 伊藤裕偉、「VI調査の成果・大蓮寺調査区の遺物」「多気遺跡群発掘調査報告」、1993.3
- ④ 斎藤孝正「東海地方の施釉陶器生産」『古代の土器研究、律令的土器様式の西東三』古代の土器研究会、1994
- ⑤ 「古代の土器研究、律令的土器様式の西東三」古代の土器研究会、1994
- ⑥ 伊藤裕偉、「VI調査のまとめと検討・土器の変遷」、「岩出地区内遺跡群発掘調査報告」、1996.3
- ⑦ 藤澤良裕、瀬戸市教育委員会編「尾呂」南部系山茶椀編年1990、その他の山茶椀もこの編年をもとに考察した。
- ⑧ 伊藤裕偉「東海道遺跡発掘調査報告」三重県教育委員会 1989.3
- ⑨ 鈴木道之助著、「図録石器入門辞典—縄文—」、柏書房1991.2
- ⑩ 久保勝正、「縄文時代早期における石器形態とその変遷」、「斎宮歴史博物館研究紀要二」1990.3.



第9図 出土遺物実測図 (1 : 4 37のみ3 : 4)



第10図 出土遺物実測図 (1 : 4 38~42は3 : 4)



第11図 出土遺物実測図 (1 : 4)

V 結語

1 出土遺物について

今回の調査で確認した遺物は土器や石器、金属製品であった。特に土器については平安時代中葉～鎌倉時代初頭頃の土師器、灰釉陶器が主であった。また土器の中に少量の輸入陶磁器が4点含まれていた。これは遺構内出土ではなかったものの近接の遺跡では採集されておらず、注目したい遺物である。これらは隣接する船津町が古代の交通の要衝であることやそれによって陸海ともに畿内、東海を問わず物産が当地に流入したことの傍証であると考えられる。

また、調査区の中央部やや北よりの2地点（実際には3地点と考えられる。）（第6図）で剥片石器や石鏃等約60点を確認した。この時期の土坑SK18・SK20とは距離があるが遺跡内の位置関係からいえば半径20m以内に収まり、ともに居住域との相関関係を有するものと考えられる^①。

2 積穴住居について

今回、調査終了直前に検出したSH1であった。すぐ西側に水道管が埋設され、工事中に削平をかなり受けていると予想されたが、残存状況は良好であった。ただ、調査区内で検出できたのは奈良時代末の建物1棟だけだったので、集落そのものの規模を考える資料にはなりえていない。おそらく地形的条件の良好な南方の畠地・荒地にはまだ、同時期の住居址が遺存していると考えられる。

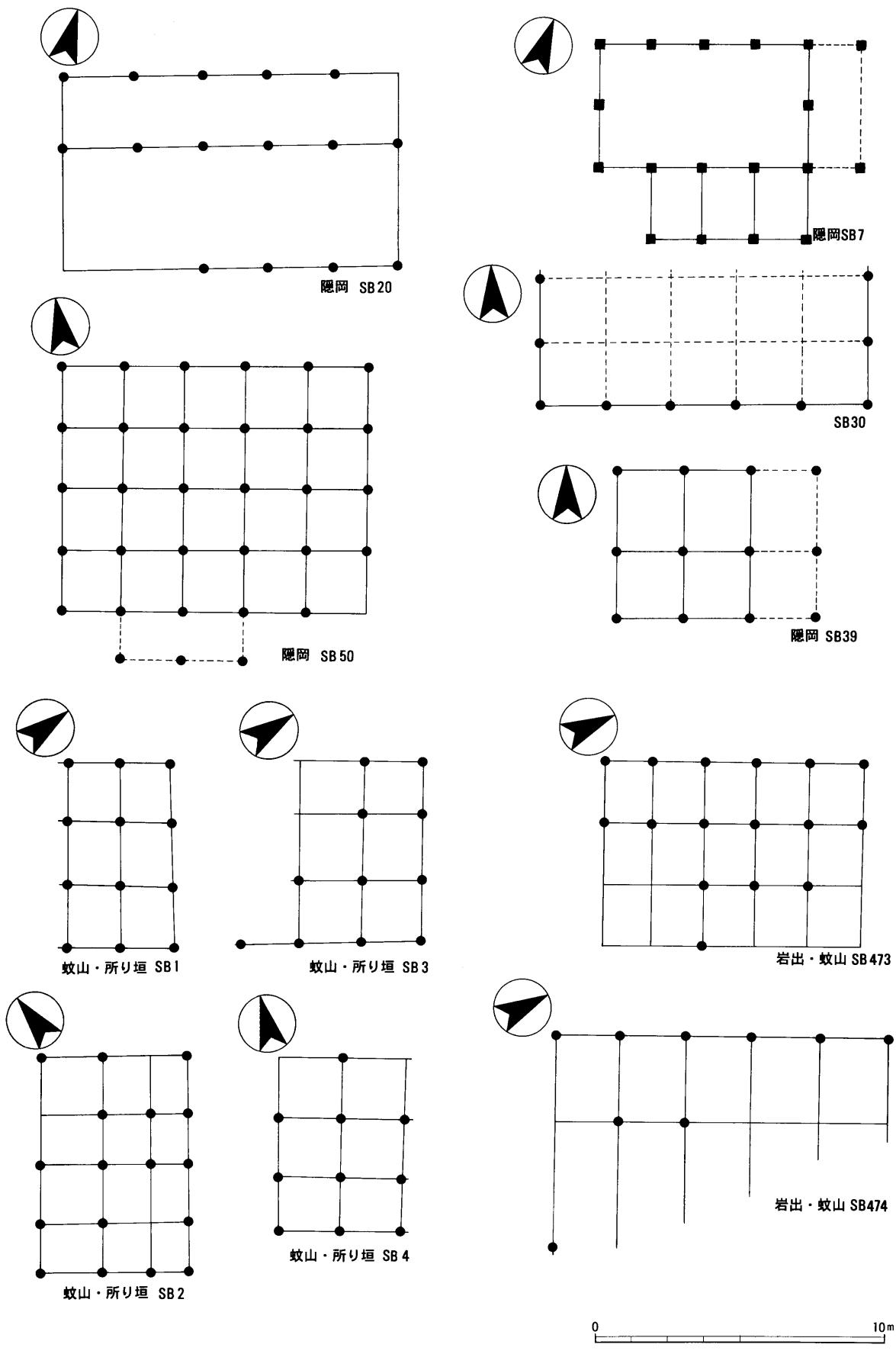
3 掘立柱建物について

松尾前田遺跡では、計4棟の建物を確認した。掘形は方形は1棟もなく、すべて円形で直径が0.3～0.4mの範囲内に収まるものであった。深さは上面での搅乱が遺構面にも及んでおり一様でないが0.3m前後である。根石を含んでいるPitも確認することができた。この志摩地方での近年の調査例は少ないものの、中南勢地域においての古代末から中世の建物の規模等を整理してみたい。平成3年調査の伊勢市杉葉崎遺跡^②、同中ノ垣外遺跡^③、同寺原B遺跡、同隱岡遺跡^④、玉城町蚊山遺跡^⑤、同牛バサマ遺跡^⑥、同小社遺跡^⑦で総柱建物、あるいは側柱を有するものとが確認されている。間取は2×3間が主流である。

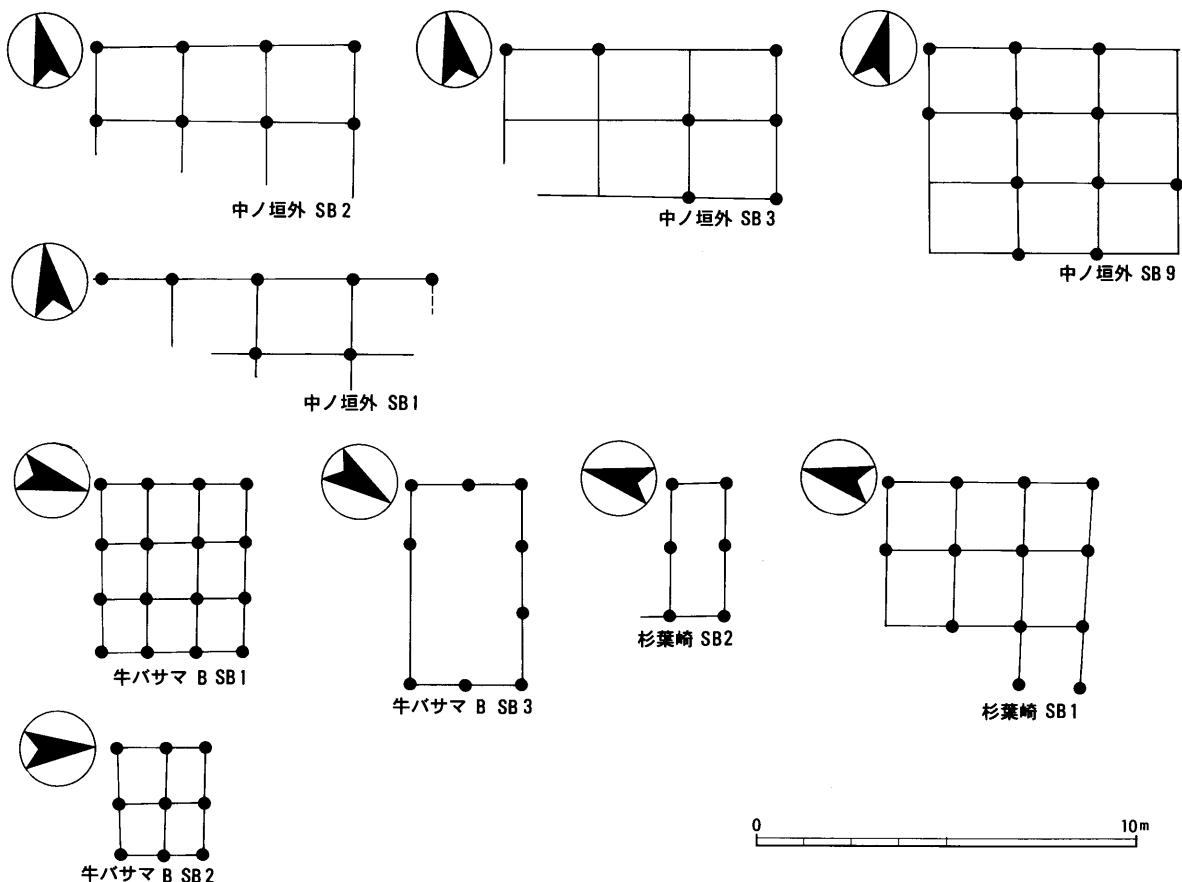
松尾前田遺跡ではSB13・SB14とともに平安時代後期の建物で北東に25°～40°に振る建物であり、庇を有しない例である。また鎌倉時代後期のSB15・SB16は平安時代前期の建物に比較すると柱間が若干広がる。庇は有しない。建物方向は逆方向の北西に偏る、掘形に根石を据えた建物である。これらは玉城町他の各遺跡でも確認されている同規模の建物跡である。おそらく中南勢地域一帯の一般集落に見られる構造物であると考えられる。（「建物一覧表」を参照）（中川）

（註）

- ①前掲註『古代の交通路』 藤岡謙二郎
- ②伊藤裕偉、「伊勢市朝熊町 杉葉崎遺跡の調査」、『研究紀要第3号』三重県埋蔵文化財センター 1994.3
- ③「伊勢市佐八町 中ノ垣外遺跡」、『近畿自動車道（勢和～伊勢）埋蔵文化財発掘調査報告』 1992.3
- ④「隠岡遺跡発掘調査報告」 伊勢市教育委員会 1987.3
- ⑤「蚊山遺跡・所リ垣地区（16）」『近畿自動車道（勢和～伊勢）埋蔵文化財発掘調査報告第4分冊』 1992.3
- ⑥伊藤裕偉、「蚊山地区の遺構」、『岩出地区内遺跡群発掘調査報告』 1996.3
- ⑦「牛バサマB遺跡」『近畿自動車道（勢和～伊勢）埋蔵文化財発掘調査報告』 1992.3
- ⑧『玉城町史』上巻、1995



第12図 中南勢地域の掘立柱建物（1：200）



第13図 中南勢地域の堀立柱建物 (1 : 200)

遺構番号	規 模				軸方向	柱間寸法		時 期	備 考
	間 数	桁行(m)	梁行(m)	面積(m ²)		桁行	梁行		
杉葉崎1	3 × 2 以上	5.5	4.0	22.0	N12° W	2.3	1.8	鎌倉初頭	総柱
2	2 × 1	3.5	1.5	5.3	E19° N	1.6	1.4	鎌倉初頭	
中ノ垣外1	3 以上 × 1 以上	8.8	2.0	17.6	N86° W	2.0	2.0	鎌倉前期	総柱
2	3 × 1 以上	6.7	2.1	14.1	N82° W	2.2	1.9	鎌倉前期	総柱
3	3 × 2	7.2	4.0	28.8	N83° W	2.5	1.9	鎌倉前期	総柱
寺原B9	3 × 3	6.5	5.7	37.1	N14° W	2.3	1.9	鎌倉前期	総柱
隠岡7	4 × 2 以上	7.2	4.4	31.7	E28° N	1.8	2.1	鎌倉後期	
20	5 × 3 以上	11.5	6.6	75.9	E18° N	2.5	2.5	鎌倉後期	
30	5 × 2 以上	11.4	4.4	50.2	N 2° E	2.3	2.2	鎌倉後期	総柱
39	3 × 2	7.0	5.0	35.0	N 2° E	2.3	2.8	鎌倉後期	総柱
50	5 × 4	10.5	8.4	88.2	N 2° E	2.0	2.0	鎌倉前期	総柱
蚊山・所リ垣1	3 × 2 以上	6.3	3.6	22.7	N80° W	2.1	1.8	鎌倉前期	総柱
2	4 × 3 以上	7.5	5.2	39.0	N 8° W	1.8	2.1	鎌倉前期	総柱
3	3 × 3	6.2	6.3	39.1	N 5° E	2.2	2.1	鎌倉前期	総柱
4	3 以上 × 2	5.9	4.3	25.4	N10° E	1.6	2.1	鎌倉前期	総柱
岩出・蚊山473	5 × 3	9.1	6.6	60.1	N23° E	1.6	2.1	鎌倉中期	総柱
474	5 × 1 以上	11.6	3.0	34.8	N23° E	2.2	3.0	鎌倉後期	総柱
牛バサマ B1	3 × 3	4.4	3.8	16.7	E20° N	1.6	1.3	鎌倉後期	総柱
2	2 × 2	2.9	2.3	6.7	E10° N	1.4	2.3	鎌倉後期	総柱
3	3 × 2	5.4	2.9	15.7	E50° N	1.6	1.4	鎌倉後期	

* 遺構番号はすべて報告書記載の掘立柱建物

第3表 中南勢地方の建物例

報告書番号	出土位置	種類(器種)	器形	計測値(cm) 径	観察事項		胎土	焼成残存度	備考	登録番号	
					形態・成形、貼り付け高台、貼り付けナデ、ナデ、摩 ロクロナデ、貼り付け高台、貼り付けナデ、ナデ、摩 滅、無釉	調整技法の特徴 ロクロナデ、重ね焼き痕、自然釉、貼り付け高台ナデ、外・灰黄2.5Y7/2 内:にぶい黄橙10YR7/2					
1 H2 SB13 P3	縦釉陶器	底部	台7.5		浅黄橙10YR8/3	やや密		並		017-07	
2 SB14 F2 P4	土師器杯	体部			口縁部口9.0 高1.5 ヨコナデ、ナデ、オサエ ヨコナデ	やや密		並		017-03	
3 SB14H6 P1	土師器碗	口縁	口12.0		ナデ	やや密		並		018-04	
4 G3 SD4	土師器杯	口縁部	口9.0	高1.5 ヨコナデ、ナデ、オサエ	浅黄橙10YR8/3 外・橙2.5Y7/6 内:にぶい黄橙10YR7/3	粗4.0mmの小石砂粒含む	並	1/10	12世紀代	002-03	
5 G3 SD4	土師器甕	口縁部	口19.0		ヨコナデ	粗1.5mmの砂粒含む	並	小片	11世紀代	002-04	
6 F4 SD5	土師器皿	体部	口13.0		ナデ	灰白2.5Y8/2 外・灰黄褐10YR5/2 内:にぶい黄橙10YR7/2	やや密	並	1/6	002-06	
7 G4 SD5	土師器鍋	口縁部	口不明		ヨコナデ(小形)	粗1.5mmの砂粒含む	並	小片	13世紀代	002-02	
8 H7 SK10	灰釉陶器	底	底6.2		施釉、貼り付けナデ、ナデ	灰白2.5Y8/1 外・灰黄褐10YR5/2 内:にぶい黄橙10YR7/2	密	並	1/3	015-02	
9 H5 SB15P8	土師器甕	口縁	口19.0		ヨコナデ、ナデ	浅黄橙10YR8/3	やや密	並	小片	018-02	
10 H5 SB15 P8	土師器甕	口縁			ヨコナデ、ハケメ	浅黄橙7.5YR8/4	やや密	並		018-03	
11 G5 SB16 P6	灰釉陶器皿	口縁	口12.0		ナデ	浅黄橙10YR8/3 灰黄2.5Y6/2	やや密	並	小片	018-06	
12 H6 SB16 P1	灰釉陶器皿	口縁	口15.0		施釉、ロクロナデ	浅黄橙7.5YR8/3 にぶい橙7.5YR7/4	やや密	並		018-07	
13 G5 SK7	土師器甕	口縁部	口24.0		ヨコナデ、オサエナデ、ナデ	浅黄橙7.5YR8/3 外・灰黄2.5Y7/1	やや密	並	1/8	12世紀代	002-01
14 G5 SK7	土師器皿	体部	口13.0		ナデ	浅黄橙7.5YR8/3 外・灰黄2.5Y7/2	やや密	並	小片	002-07	
15 G5 SK7	陶器	山茶碗	底部	台7.0	ロクロナデ、貼り付け高台、糸切り	内:浅黄2.5Y7/3	やや密	並	小片	瀬戸 001-03	
16 G5 SK7	山茶碗	瀬戸	底部	台6.7	自然釉、ロクロナデ、貼り付けナデ、糸切り	内:灰黄2.5Y7/2	やや密	並	1/4	001-02	
17 G5 SK7	陶器	山茶碗	底部	台6.2	ロクロナデ、貼り付け高台、貼り付けナデ、糸切り	外・にぶい橙7.5YR6/4	やや密	並		001-04	
18 G5 SK7	陶器	捏鉢	底部	底19.0	ナデ、ケズリ	内:にぶい橙7.5YR7/2	やや密	並		001-07	
19 H7 SD9	内耳鍋	尾張	口縁部	口28.5	ヨコナデ	外・にぶい橙7.5YR7/4	やや密	並	小片	002-05	
20 H7 SD9	陶器	山茶碗	口縁部	口17.0	ロクロナデ	灰5Y6/	やや密	並	1/6	渥美 001-05	
21 H7 SD9	灰釉陶器	底部	台8.3		ロクロナデ、貼り付け高台、貼り付けナデ	灰白10YR7/4	やや密	並	1/3	001-01	
22 H7 SD9	陶器	捏鉢	底部	底13.0	ナデ、オサエ、ケズリ	橙2.5YR6/6	やや密	並		014-07	
23 F11 SK12	灰釉陶器	底部	底6.8		ロクロナデ、貼り付けナデ、ナデ	浅黄2.5Y7/3	やや密	並	1/3	014-05	
24 F11 SK12	陶器	山茶碗	底部	底8.6	ロクロナデ、貼り付けナデ、モミガラ痕	灰黄2.5Y7/2	密1mmの微砂粒含む	良	1/6	常滑 014-06	
25 F11 SK12	陶器	山茶碗	底部	底6.4	ロクロナデ、糸切り痕	浅黄2.5Y7/3	粗3.2mmの砂粒含む	並	1/4	014-07	
26 F11 SK12	陶器	鉢	口縁部		ロクロナデ、焼付着	にぶい橙5YR6/4	粗2.8mmの砂粒含む	並	小片	015-06	
27 F11 SK12	陶器	擂鉢			ロクロナデ、施釉	外・暗褐7.5YR3/4	やや密 1.2mmの微砂粒含む	並	小片	近世 瀬戸 015-05	
28 F11 SK12	鉄製金具			長13.8 幅3.1 厚0.8	一部鋸激しい、					015-07	
29 F12 SK19	陶器	碗	底部	底5.6	施釉、ナデ、削り出し高台、スタンプ文	浅黄2.5Y7/3	密	良	1/3	015-01	

第4表 遺物観察表1

報告 番号	出土位置	種類(器種)	器形	計測値(cm)	形態・成形・調整技法の特徴		色	調	胎	土	焼成	残存度	備考	登録番号
					径	器高								
30	F12	SK19	灰釉陶器 梶	口14.0 口縁	ロクロナデ	浅黄2.5Y7/3	やや粗 0.8mmの微砂粒含む	良	小片			015-03		
31	G2	SD3	陶器 山茶椀	底部 台6.5	ロクロナデ、貼り付け高台、貼り付けナデ	灰白2.5Y8/2	やや密	並	1/5	瀬戸		002-08		
32	G7包含層	陶器 梶	底部 底5.5	施釉、ロクロナデ、ロクロケズリ	外灰黄2.5Y7/2 内:灰白5Y7/2 (釉)	外灰黄7.5GY8/1 内:青灰10BG6/1	やや密	並	3/4	近世		006-09		
33	E10	SD8	陶器 梶	体部 口9.2 高4.8	施釉、アキ	外:明綠灰7.5GY8/1 内:青灰5BG6/1	密	良	僅か	肥前		016-02		
34	F9	SD8	陶器 梶	口縁 口10.0	施釉	外:明綠灰10GY8/1 内:青灰5BG6/1	密	良	1/8			016-03		
35	E7	SD8	陶器 山茶椀	底部 底8.6	ロクロナデ、貼り付けナデ、糸切り痕	浅黄10YR8/3	やや密 6.5mmの小石含む	1/8				014-04		
36	G7	P4	陶器 梶	底部 台6.7	ロクロナデ、貼り付け高台、貼り付けナデ、糸切り	浅黄2.5Y7/3	やや密	並	1/3			017-06		
37	C9	P1	石鍛		長1.96幅1.37厚0.37重0.8チヤート凹基無基					胸欠		022-01		
38	H9	包含層	楔形石器		長1.76幅2.25厚0.38重3.7チヤート					良		022-02		
39	G6	包含層	楔形石器		長1.69幅2.14厚0.87重3.2チヤート					完存		022-03		
40	F11包含層	石鍛			長1.4幅1.31厚0.25重0.3サスカイト凹基無基					完存		022-04		
41	F14包含層	スクレーパー			長3.38幅4.00厚1.28重20.8チヤート					完存		022-05		
42	G8	包含層	剥片		長5.02幅2.61厚1.90重21.4チヤート					完存		022-06		
43	H4包含層	土師器 Ⅲ	口縁部 口8.6	横ナデ、ナデ	横ナデ、ナデ	灰白10YR8/2	粗3.2mmの砂粒含む	並	1/4	12世紀代	004-04			
44	H3包含層	土師器 Ⅲ	口縁部 口8.9	横ナデ、ナデ	横ナデ、ナデ	灰白10YR8/2 檻5YR 7/6 黒2.5Y2/1	粗2mmの砂粒含む	並	1/4	12世紀代	004-03			
45	H7包含層	土師器 Ⅲ	口縁部 口11.8	横ナデ	横ナデ	外灰白10YR8/2 内:浅黄10YR8/3	密1.8mmの砂粒含む	並	1/4	13世紀中	004-02			
46	H3包含層	土師器 Ⅲ	底部 口9.8 高2.0	ナデ、剥離ひどく調整不明	外:にぶい檻3YR 7/4 内:黒褐7.5YR3/1	粗3mmの砂粒含む	並					004-05		
47	H4包含層	灰釉陶器 梶	口縁部 口16.0	灰釉、ロクロナデ	外灰白2.5Y8/1 内:にぶい黄2.5Y6/3	密	良	1/10	狼投	010-02				
48	F12包含層	灰釉陶器 梶	底部 底7.6	ロクロナデ、貼り付けナデ、糸切り痕	にぶい黄10YR7/3	密4.8mmの小石含む	不良	1/4				014-08		
49	G7包含層	灰釉陶器 梶	底部 底7.0	ロクロナデ、ナデ、貼り付けナデ	にぶい黄10Y R6/3	密1mmの微砂粒含む	並	1/4	狼投	003-01				
50	H7包含層	灰釉陶器 梶	底部 底6.5	ロクロナデ、貼り付けナデ、糸切り痕	浅黄2.5Y 7/3	やや密 1mmの微砂粒含む	並	1/6	狼投	004-01				
51	H7包含層	灰釉陶器 梶	底部 台7.1	灰釉、ロクロナデ、貼り付け	灰白2.5Y8/2	密	良	1/4	狼投	009-06				
52	E15包含層	灰釉陶器 梶	底部 台8.0	自然釉、ロクロナデ、ナデ、貼り付け後ナデ、糸切り痕	にぶい黄10YR6/4	密1.0mmの砂粒含む	良	1/2	狼投	020-05				
53	G7包含層	陶器 山茶椀	底部 底7.0	ロクロナデ、貼り付けナデ、糸切り痕	外灰白2.5Y7/1 内:灰黄2.5Y 7/2	密1.1mmの砂粒含む	並	1/3	狼投	003-03				
54	G7包含層	灰釉陶器 山茶椀	底部 底7.4	ロクロナデ、貼り付けナデ、糸切り痕	浅黄2.5Y7/3	密1.2mmの砂粒含む	並	1/3			003-04			
55	G6包含層	陶器 山茶椀	底部 底7.8	ロクロナデ、ナデ、貼り付けナデ	にぶい黄2.5Y6/3	密1.3mmの砂粒含む	並	1/4	渥美	003-05				
56	G7包含層	陶器 山茶椀	底部 底6.8	ロクロナデ、ナデ、貼り付けナデ	浅黄2.5Y7/3	密1.4mmの砂粒含む	並				003-06			
57	G7包含層	灰釉陶器 梶	底部 底6.8	ロクロナデ、ナデ、貼り付けナデ	浅黄2.5Y 7/3	密1.5mmの砂粒含む	並	1/2	狼投	003-02				
58	H7包含層	陶器 梶	底部 底4.8	ロクロナデ、貼り付けナデ、糸切り痕	にぶい黄10YR7/3	密1.6mmの砂粒含む	並	1/2			003-08			

第5表 遺物観察表2

報告 番号	出土位置	種類(器種)	器形	計測値(cm) 径	形態・成形・調製技法の特徴		色	調 査	胎	土	焼成 残存度	備 考	登録番号
					器高	底							
59	G7包含層	陶器	山茶椀	台6.8	ロクロナデ、糸切り痕		灰白5Y7/1		密1.7mmの砂粒含む		良 1/3	瀬戸北部	009-03
60	H4包含層	陶器	山茶椀	台6.5	ロクロナデ、貼り付け、糸切り痕		灰白5Y7/1		密1.8mmの砂粒含む		良 1/3	瀬戸北部	009-04
61	F6包含層	陶器	山茶椀	台8.0	ロクロナデ、貼り付け、糸切り痕		灰白N7/		密1.9mmの砂粒含む		良 1/4	渥美	008-02
62	G7包含層	陶器	山茶椀	台7.4	ロクロナデ、貼り付け、糸切り痕		灰白2.5Y7/1		密1.10mmの砂粒含む		良 完存	渥美	009-01
63	H7包含層	陶器	山茶椀	台7.4	ロクロナデ、貼り付け、糸切り痕		灰白5Y7/1		密1.11mmの砂粒含む		良 1/2	渥美	009-02
64	H7包含層	陶器	山茶椀	台8.0	ロクロナデ、貼り付け、糸切り痕		灰黄2.5Y7/2		密1.12mmの砂粒含む		良 1/6	渥美	008-04
65	H7包含層	陶器	山茶椀	台8.5	ロクロナデ、貼り付け		灰白N7/		密1.13mmの砂粒含む		良 1/4	渥美	009-05
66	I5包含層	陶器	山茶椀	台8.2	ロクロナデ、貼り付け、糸切り痕、モミ穀痕		灰白5Y8/1		密1.14mmの砂粒含む		良 1/2	渥美	008-03
67	H4包含層	陶器	山茶椀	口縁部 口15.0	灰かぶり、ロクロナデ、突き刺した痕、体部1.6残		灰白5Y 7/1		密1.15mmの砂粒含む		良 1/10	猿投	010-01
68	H3包含層	陶器	山茶椀	口縁部 口16.0	灰かぶり、ロクロナデ		灰黄2.5Y7/2		密1.16mmの砂粒含む		良 1/8	猿投	010-03
69	B11包含層	土師質	土鍤		長3.5幅1.4厚1.4重4.555g						良 完存		004-07
70	E5包含層	土師質	土鍤		長3.1幅1.45厚4.5重5.530 g						良		004-08
71	E5包含層	土師質	土鍤		長2.8幅1.1厚1.05重2.120 g						良 完存		004-09
72	G1包含層	灰釉陶器	小皿	底部	柱状高台、灰かぶり、ロクロナデ、糸切り痕		にぶい黄2.5Y6/3		密		良		010-04
73	F5包含層	陶器	おろし皿	口14.6	糸切り、露胎、底径7.1 (底部1/2強残)		外:オリーブ黄7.5Y6/3 断面:淡黄2.5Y8/3	密			良 1/4	瀬戸後期	008-01
74	H7包含層	灰釉陶器	壺	底	ロクロナデ、ケズリ、貼り付けナデ、ナデ		灰黄2.5Y 7/2		やや密		並 1/8		006-02
75	G8包含層	土師器	壺	口縁部 口12.0	横ナデ、ナデ		外:にぶい5YR7/4 内:にぶい5YR6/4		密0.5mmの微形粒含む		並 1/8		005-05
76	G5包含層	土師器	壺	口縁部 口14.0	横ナデ、ハケ外4本/cm、内6本/cm		にぶい7.5YR6/4		やや密0.8mmの砂粒含む		並 1/8		005-04
77	F3包含層	土師器	壺	口縁部 口15.7	横ナデ、ナデ、オサエ		外:灰黄褐10YR6/2 内:にぶい黄10YR7/3		やや密2mmの砂粒含む		並 1/8		005-03
78	G3包含層	土師器	壺	口縁部 口17.9	横ナデ、ナデ、ハケメ		外:浅黄橙7.5YR8/4 内:にぶい黄橙10YR6/3		相2mmの砂粒含む		並 1/10		005-02
79	H6包含層	土師器	壺	口縁部 口14.7	横ナデ、ナデ、ハケ、ハケメ		灰白10YR8/2		やや密2.7mmの砂粒含む		並 1/5		005-01
80	E10包含層	陶器	鉢	口縁 口19.2	施釉、ロクロ使用		素地:黄灰2.5Y6/1 細色:オリーブ黄5Y6/1		密微砂粒含む		良 1/8		020-04
81	D14包含層	火舎	口縁	口23.0	釉色:灰褐5YR4/2素地:にぶい橙2.5YR6/4、ロクロナデ、素地:橙2.5YR6/6		素地:白、釉色:白		やや粗4.0mmの小石含む		良 1/6		021-02
82	G10包含層	瓦			ケズリ、ナデ、ワレ 第孔		外:暗灰N3/0 内:灰白N8/0	密			並		013-01
83	F11包含層	陶器	小椀	体部	口7.8	高4.7	高台径3.4(1/4残)、施釉花びらのみピンク、他は黒		素地:白、釉色:白		良 1/4		021-04
84	F14包含層	陶器	注口椀	体部	口3.4	高2.4	注口1箇所、施釉、前後2箇所青、高台径2.6		素地:白、釉色:白		良 2/3		021-03
85	F9包含層	陶製土管		体部			暗赤褐5YR2/3		やや粗3.5mmの小石含む		並		007-01
86	F9包含層	刀装具	鍔止	長4.0	幅2.3		ナデ、施釉、横線1本、円盤状に加工してい		素地:黒褐7.5YR3		完存		013-02
87	D13包含層	陶器	大壺	口縁	口37.0		ナデ、施釉、横線1本、円盤状に加工してい		素地:黒褐7.5YR3		少		021-01

図6表 遺物観察表3



調査区東半（西から）



調査区西半（東から）



調査区東半（西から）



S K18（南から）



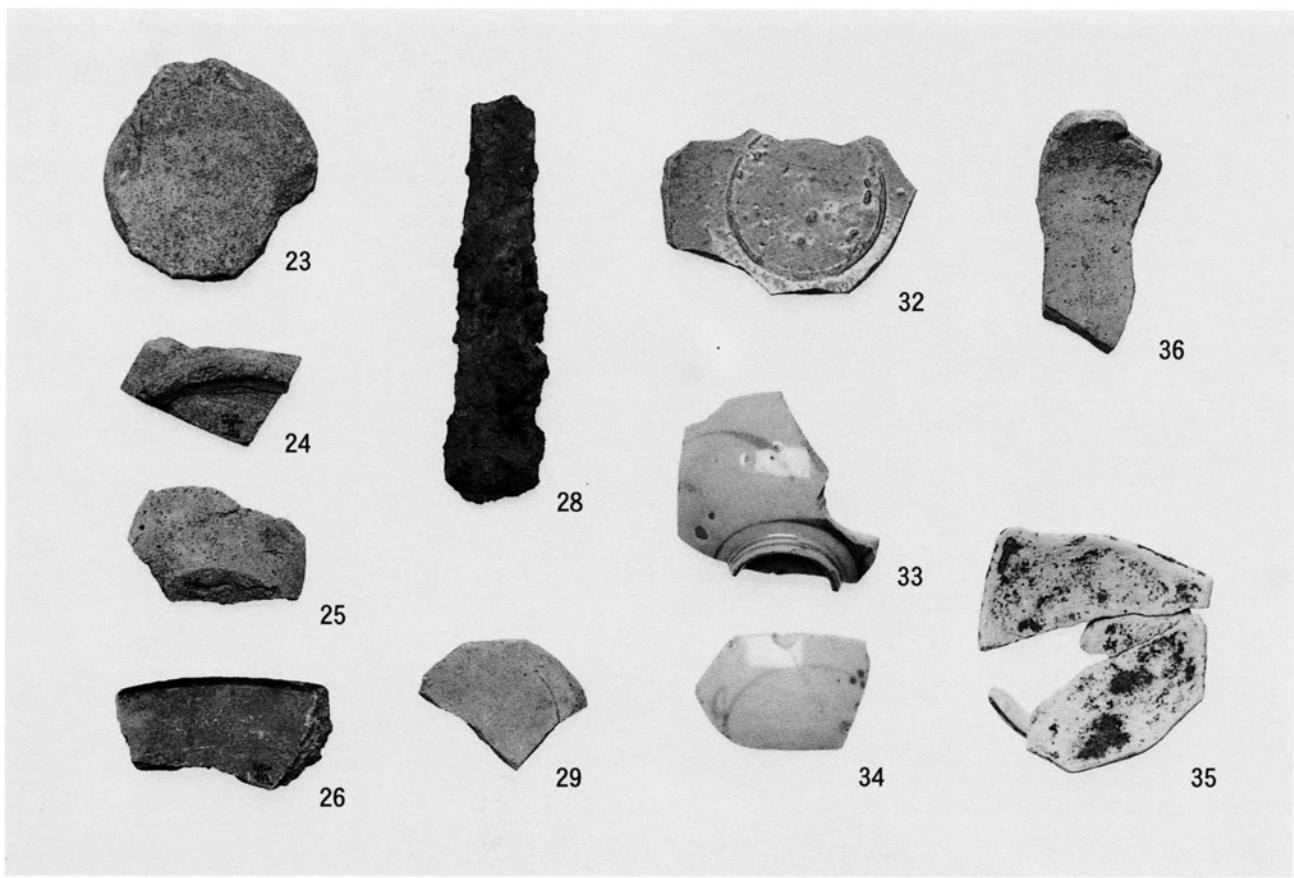
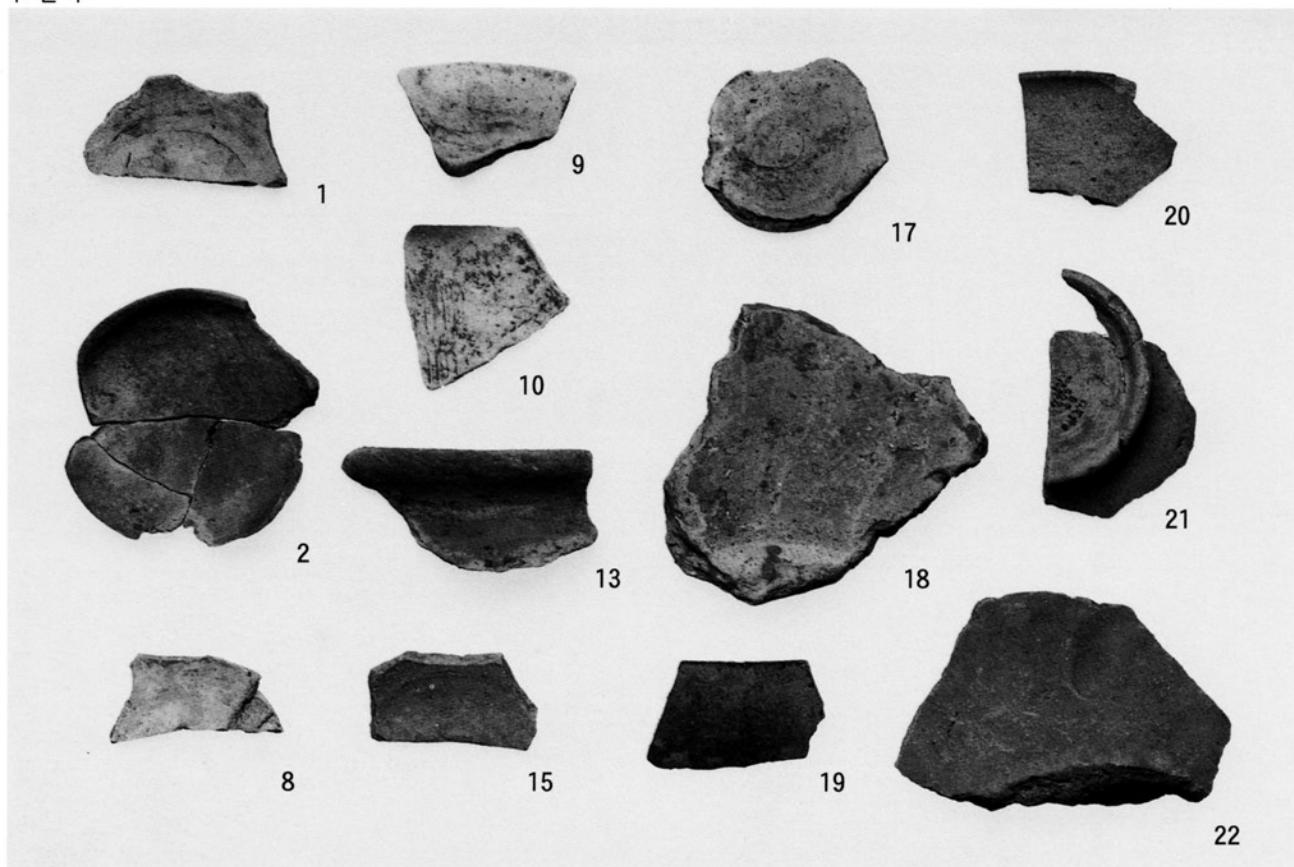
S K20（東から）



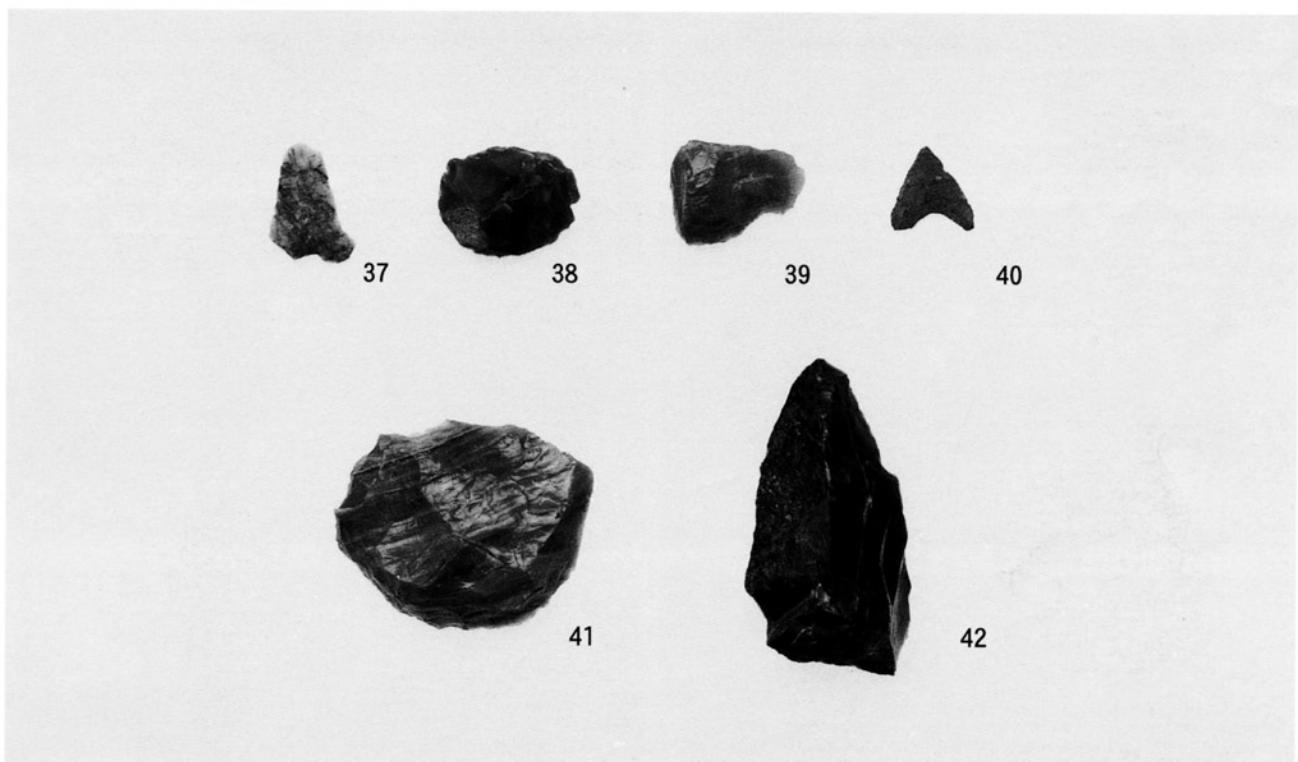
S B 13・14 (西から)



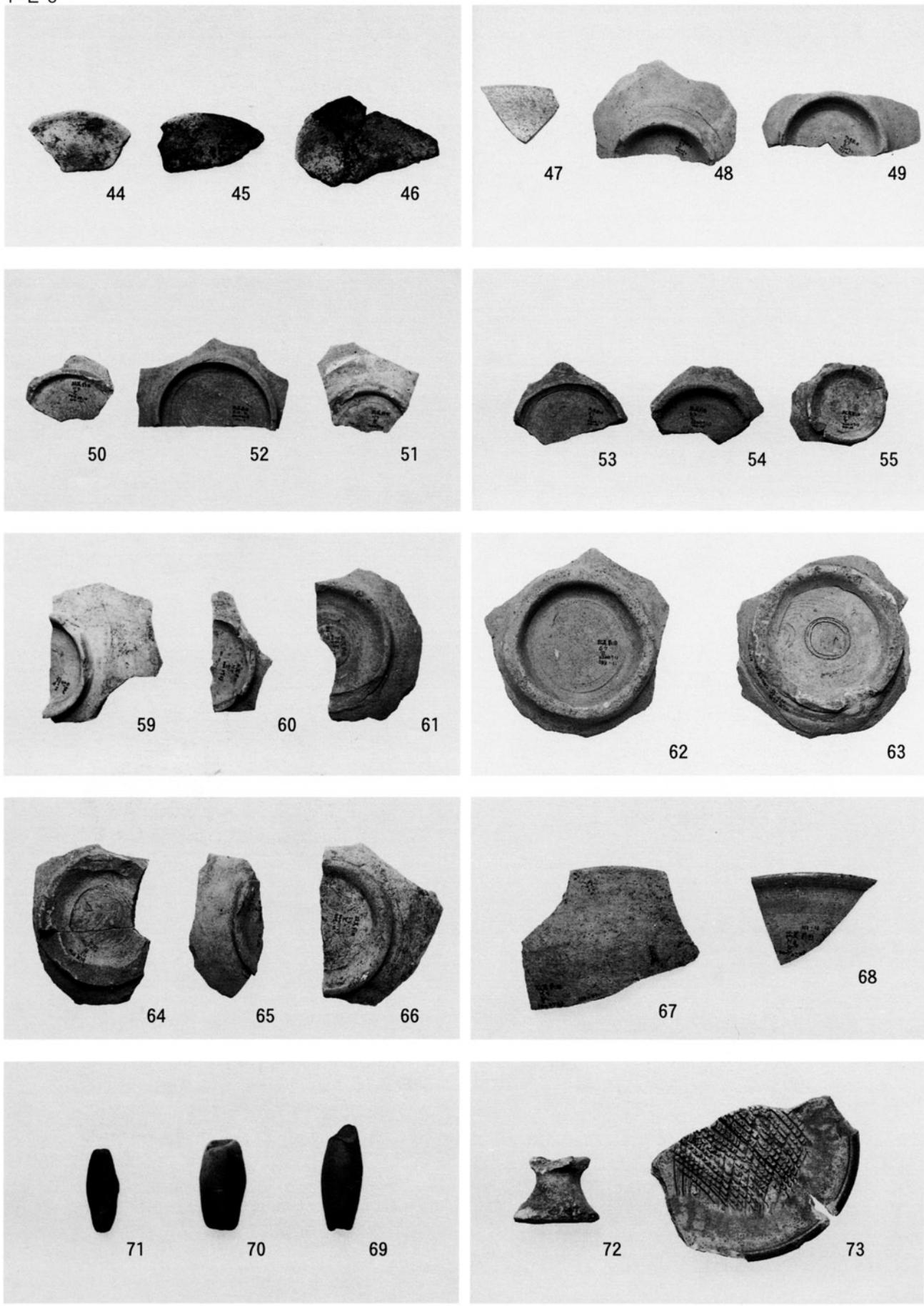
土坑群 (東から)



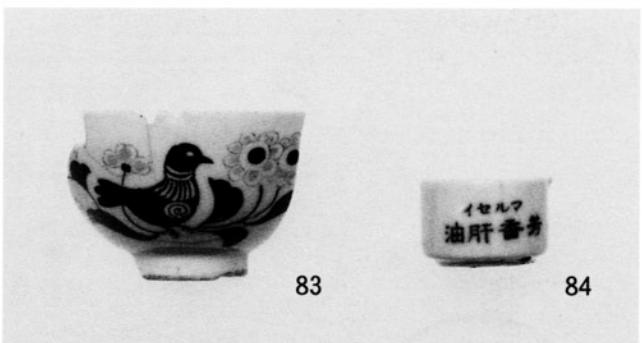
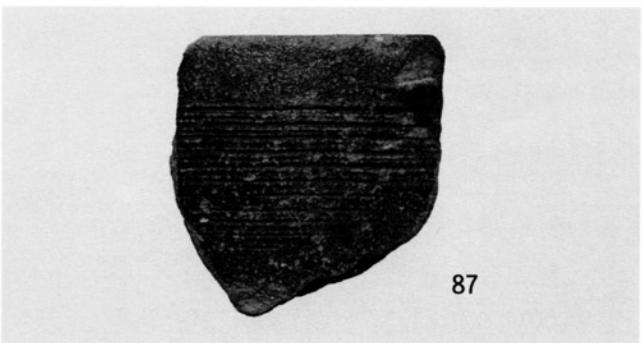
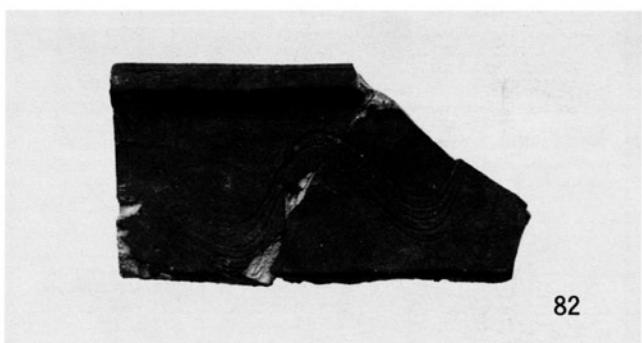
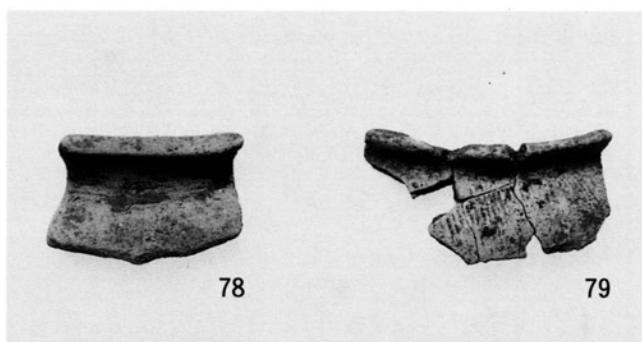
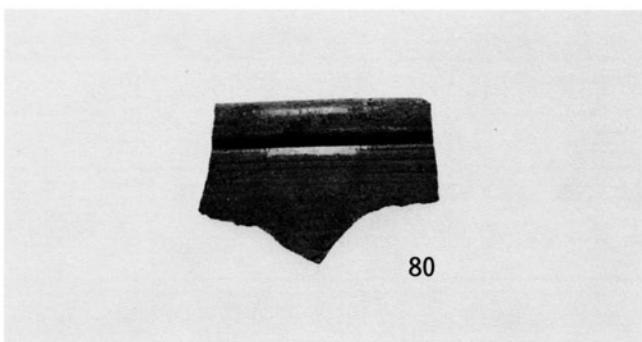
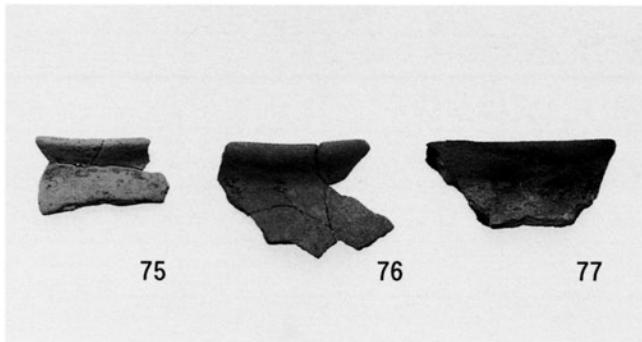
出土遺物 1 (縮尺不同)



出土遺物 2 (縮尺不同)



出土遺物 3 (縮尺不同)



出土遺物 4 (縮尺不同)

報告書抄録

ふりがな	まつおまえだいせきはつくつちょうさほうこく						
書名	松尾前田遺跡発掘調査報告						
副書名							
卷次							
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	224						
編著者名	中川 明・筒井 英俊						
編集機関	三重県埋蔵文化財センター						
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 TEL 0596(52)1732						
発行年月日	西暦2001年3月31日						

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 °, ′, ″	東経 °, ′, ″	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
まつおまえだいせき 松尾前田遺跡	とばしまつおぢょう 鳥羽市松尾町 あざまえた 字前田	211	333	36° 26' 10" 136° 50' 48"	2000.6.12 2000.9.8	1,350m ²	平成12年度 (主)鳥羽磯 部線緊急地 方道路(B) 整備事業に 伴う調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺構	特記事項
松尾前田遺跡	集落跡	縄文時代	土坑	サヌカイト石鏃・チャート削器	
		奈良時代	堅穴住居	土師器杯	
		平安時代	掘立柱建物	土師器甕・灰釉陶器椀	
		鎌倉時代 ～室町時代	溝	土師器鍋・山茶椀	
			土坑	常滑焼甕	
		江戸時代		肥前焼椀	

平成13(2001)年3月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年11月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告224

松尾前田遺跡発掘調査報告

三重県鳥羽市松尾町

2001年3月

編集
発行 三重県埋蔵文化財センター

印刷 (有)第一プリント社